

# 春昼

泉鏡花

青空文庫



「お爺さん、お爺さん。」

「はあ、私けえ。」

と、一言で直ぐ応じたのも、四辺が静かで他には誰もいなかった所為であろう。そうでないと、その皺だらけな額に、顱巻を緩くしたのに、ほかほかと春の日がさして、とろりと酔ったよ  
うな顔色で、長閑かに鋏を使う様子が——あのまたその下の  
柔らかな土に、しつとりと汗ばみそうな、散りこぼれたら紅の夕陽の  
中に、ひらひらと入って行きそうな——暖い桃の花を、燃え立つ

ばかり揺ぶつて頻しきりに囀さえずっている鳥の音ねこそ、何か話をするように聞こうけれども、人の声を耳にして、それが自分を呼ぶのだとは、急に心こころ付づきそうもない、恍惚うっとりとした形であつた。

こつちもこつちで、かくたちどころに返答こたへされると思つたら、声を懸かけるのじやなかつたかも知れぬ。

何なぜ為ななら、さて更あらためて言うことが些ちと取り留とめのない次第しだいなので。本来もとよりならこの散策さんさく子が、そのぶらぶら歩行あるきの手すさびに、近頃かいもと買か求もとめた安あん直ちよくな杖ステッキを、真ま直すすぐに路みちに立てて、鎌倉かまくらの方かたへ倒たふれたら爺じいを呼よぼう、逗ず子しの方かたへ寝ねたら黙もくつて置おこう、とそれでも事は済すんだのである。

多た分ぶんは聞きえまい、聞きえなければ、そのまま通り過あぎる分ぶん。余計よけい

な世話だけれども、だまり黙きりも些ちつと気になつた処。ところひびき響の応ずるが如きその、わし(はあ、私けえ)には、いささ聊か不意を打たれた仕誼。しぎ

「ああ、お爺さん。」

と低いよつめがき四目垣へ一足ひとあし寄ると、ゆつくりと腰をのして、背後うしろ

へよいとこさとそ反るように伸びた。親仁おやじとの間は、隔てる草も別

になかつた。三筋みすじばかり耕たがやされた土が、勢いきおい込こんで、むくむ

くと湧わき立つような快活な香を籠こめて、しかも寂せき寞ぼくとあるのみ

で。勿もちろん論、根を抜かれた、肥料こやしになる、青々あおあおと粉こなを吹いたそ

ら豆の芽生めばえに交まじつて、紫雲英れんげそうもちらほら見えたけれども。

とりうち鳥打に手をかけて、

「つかんことを聞くがね、お前なんさんは何なんじやないかい、この、其そ

こ  
処の角屋敷かどやしきの内うちの人じやないかい。」

親仁おやしはのそりと向直むきなつて、皺しわだらけの顔に一杯の日当り、桃

の花に影がさしたその色に対して、打向うちむかうその方ほうの屋根いらかの蕘かは、

白昼青あおむぎ麦あぶを烘あぶる空に高い。

「あの家うちのかね。」

「その二階ふたかいのさ。」

「いんえ、違います。」

と、いうことは素気そっけないが、話を振切ふりきるつもりではなさそうで、肩ひとをゆす一ツ揺りながら、鍬くわの柄えを返かへして地つちについてこつちの顔を見  
た。

「そうかい、いや、お邪魔をしたね、」

これを機しおに、分れようとする、片手で顱はちまき巻かなぐを撈り取つて、

「どうしまして、邪魔も何もござりましねえ。はい、お前まえさま様、

何か尋ねたずごとさつしやるかね。彼処あそこの家は表うち門おもてもんさ閉しまつており

ませども、貸家かしゃではねえが……」

その手拭てぬぐいを、裾すそと一緒に、下からつまみ上げるように帯はぎへ挟

んで、指を腰の両提ふたつきげに突つきこ込んだ。これでは直ぐにも通れない。

「何なね、詰つまらん事ことさ。」

「はいい？」

「お爺おやさんが彼家あそこの人ならそう言いつて行ゆこうと思おもつて、別に貸家

を捜たずしているわけではないのだよ。奥の方おくのほうで少わい婦人おんなの声こゑがした

もの、空家あきやでないのは分わつてゐるが、」

「そうかね、女中衆も二人ばツかいるだから、」

「その女中衆についてさ。私がね、今彼処の横手をこの路へかか  
つて来ると、溝の石垣の処を、ずるずると這つてね、一匹いた  
のさ——長いのが。」

## 二

怪訝な眉を臆面なく日に這わせて、親仁、煙草入をふらふ  
ら。

「へい、」

「余り好物な方じゃないからね、実は、」



と言つて、笑いながら、

「その癖くせ恐おそいもの見たさに立留たちどまつて見ていると、何なんじやないか、やがて半分ばかり垣根へ入つて、尾を水の中へばたりと落して、鎌かまく首びを、あの羽目板はめいたへ入れたらうじやないか。羽目はめの中は、見とこゆた処湯殿らしい。それとも台所かも知れないが、何しろ、内うちにや少わかい女たちの声がするから、どんな事で吃驚びっくりしまいものでもない、と思ひます。

あれツきり、座敷へなり、納戸なんどへなりのたくり込めば、一も二もありやしない。それまでというもんだけれど、何処どこか板いたの間にとぐろでも巻いている処へ、うっかり出で会くわしたら難儀なんぎだろう。

どの道余計みちなことだけれど、お前さんを見かけたから、つい其そ

処こだし、彼あそこ処うちの内の人だったら、ちよいと心づけて行ゆこうと思つてき。何ね、此ここ処こらじゃ、蛇なんか何でもないのかも知れないけれど、」

「はあ、あおだいししょう青大将かね。」

といいながら、大きな口をあけて、奥おく底そこもなく長閑のどかな日の舌に染しむかと笑いかけた。

「何でもなかあねえだよ。彼あそこ処こさ東京の人だからね。この間あいだも一件つけんもので大騒ぎをしたでがす。行つて見て進しんぜますべい。疾とうに、はい、何ど処つかずらかったも知んねえけれど、台所の衆とは心こころやす安やすうするでがすから、」

「じゃあ、そうして上げなさい。しかし心ない邪魔をしたね。」

「なあに、お前様、どうせ日は永えでがす。はあ、お静かにござらつせえまし。」

こうして人間同士がお静かに分れた頃には、一件はソレ竜の如きもの歟、凡慮の及ぶ処でない。

散策子は踵を廻らして、それから、きりきりはたり、きりきりはたりと、鶏が羽うつような梭の音を慕う如く、向う側の垣根に添うて、二本の桃の下を通つて、三軒の田舎屋の前を過ぎる間に、十八、九のと、三十ばかりなのと、機を織る婦人の姿を二人見た。

その少い方は、納戸の破障子を半開きにして、姉さん冠の横顔を見た時、腕白く梭を投げた。その年取つた方は、前庭

の乾いた土に筵むしろを敷いて、背うしろむきに機台はただいに腰かけたが、トンと足をあげると、ゆるくキリキリと鳴つたのである。

唯ただそれだけを見て過ぎた。女おんな今川いまがわの口絵くちえでなければ、近頃

は余り見掛けない。可懐なつかしい姿、些ちつと立佇たちどまつてという気もした

けれども、小児こどもでもいればだに、どの家も皆野面うちみんなめらへ出たか、人氣ひとけ

はこの外ほかになかったから、人馴ひとなれぬ女おんなだち物恥ものはずをしよう、いや、

この男おともの倅おもかげでは、物怖ものおじ、物驚ものおどろきをしようも知れぬ。この路を

後あとへ取つて返して、今蛇へびに逢あつたという、その二階屋にかいやの角かどを曲る

と、左の方に脊せの高い麦むぎ畠ばたけが、なぞえに低くなつて、一面に

颯さつと拈あがる、浅あさ緑みどりに美うつくしい白波しらなみが薄うつつりと靡なびく渚なぎさのあたり、雲

もない空あかりに歴々ありありと眺ながめらるる、西洋館せいようくわんさえ、青異人あおいじん、赤異あか

人と呼んで色を鬼のように称となうるくらい、こんな風ふうの男おとこは髯ひげが  
 なくても（帽子シヤツポ被かぶ）と言いうと聞きく。

尤もつとも一方いっぽうは、そんな風ふうに——よし、村むらのものものの目めからは青あおお

鬼に赤あか鬼おでも——蝶ちようの飛とぶのも帆艇ヨットの帆ほかと見みゆるばかり、海うみ

水浴みづあびに開ひらけているが、右みぎの方は昔むかしながらの山やまの形なり、真ま黒くろに、大お

鷲おわしの翼つばさ打うち襲かねたる趣おもむきして、左ひだり右みぎから苗代なわしろ田だに取とり詰つむる峰たかねの

棲つま、一重ひとえは一重ひとえごとに迫せまつて次第しだいに狭せまく、奥おくの方かた暗くらく行ゆき詰つつた

あたり、打ぶつけなりの茅屋かややの窓まどは、山やまが開まいた眼まなこに似にて、あたか

も大おなる墓ひきの、明あけ行ゆく海うみから搔かいすくく、谷間たにまに潜ひそむ風情ふぜいであ

る。

三

さればかわら瓦をや焚くかまど竈の、屋やの棟むねよりも高いのぬしがあり、主の知れぬ  
みや宮もあり、無縁になつた墓地もあり、頻しきりに落ちるつばき椿もあり、田に  
おおきとしようはおおきしもある。

あの、西せい南なん一帯の海しおの潮が、浮世うきよの波なみに白帆しろほを乗せて、この  
 しばらくの間につづらおり九十九折ある山かの峽かいを、一ツつずつわん湾わんにして、奥おくま  
 で迎むかひに来ぬ内うちは、いつまでも村人むらびとは、むむこう向むきになつて、ちちら  
 ほらと畑はたう打うつてういるであらう。

丁ちようどいまのまがりかど曲まがりかど角かどの二階家ふたかいあたりに、屋根やねの七なな八やちツつ重かさなつた  
 のが、この村むらの中心ちゆうしんで、それから峽かいの方かたへ飛とび々とびにまばらになり、

うみて  
海手と二、三町が間人家が途絶えて、かえつて折曲つたこの小  
みち  
路の両側へ、また飛々とびとびに七、八軒続いて、それが一部落になつ  
ている。

おき  
梭を投げた娘の目も、山の方へ瞳ひとみが通い、足踏みをした女房の  
胸にも、海の波は映うつらぬらしい。

通りすがりに考えつつ、立た離はなれた。面おもてをあつて菜種なたねの花まばゆ。眩

い日影が輝くばかり。左手ゆんでのがけの緑なものも、向うの山の青いものも、  
かたえ  
偏まつきにこの真黄色いろの、僅わずかに限あるを語るに過ぎず。足許あしもとの細せせら

ぎ  
流いちだんや、一段颯と簾すだれを落して流るるさえ、なかなか花の色を

薄くはせぬ。

ああ目覚めざましいと思う目に、ちらりと見たのみ、呉くれ織はとり文あやは

織とりは、あたかも一枚の白紙しらかみに、朦朧もうろうと描えがいた二個ふたつのその姿を、たすき残して余白を真黄色まえたれに塗ぬりつたよう。二人の衣服きものにも、手拭てぬぐいにも、襷たすきにも、前垂まえだれにも、織はたつていたその機はたの色にも、聊いささかもこの色のなかつただけ、一入ひとしお鮮麗あざやかに明瞭うきだに、脳中えがに描いき出いだされた。勿論もちろん、描はいた人物はつきりを判然うきだと浮出うきださせようとして、この彩さいし色よくで地じを塗ぬり潰つぶすのは、画えの手段えに取とつて、是ぜか、非ひか、巧こうか、拙せつか、それは菜の花あずかの預あり知かる処ところでない。

うつとりするまで、眼まのあたり前真黄色まのあたりな中に、機織はたおりの姿の美しく宿とどつた時、若い婦人おんなの衝つと投げた梭おさの尖とから、ひらりと燃もえて、いま一人の足下あしもとを閃ひらめいて、輪わになつて一ツ勿ひとねた、朱しゆに金色こんじきを帯いびた一いち条じようの線せんがあつて、赫かく耀ようとして眼まなこを射ながれ、流ながれ



ちなる草に飛んだが、火の消ゆるが如くやがて失せた。

赤やまかがし棟蛇なたねが、菜種なたねの中を輝いて通つたのである。

悚然ぞつとして、向直むきなると、突つき当りあたが、樹の枝から梢こずえの葉はへ擲から

んだような石段で、上に、茅かやぶきの堂の屋根が、目近まぢかな一いち朶だの雲

かと見える。棟むねに咲いた紫羅傘いちはつの花の紫も手に取るばかり、峰の

みどりの黒くろ髪かみにさしかざされた装よそおいの、それが久能谷くのやの觀音堂かんのんどう。

我が散策子そここころぎは、其処そこを志こころざして来たのである。爾時そのとき、これから

参ろうとする、前途ゆくての石段の真下ほんの処へ、殆ど路の幅一杯おおきに、両

側おつかぶから押被おつかぶさつた雑樹ぞうきの中から、真向まむきにぬつと、大な馬おおきの顔が

むくむくと湧わいて出た。

唯ただ見る、それさえ不意ただな上、胴体ただは唯ただ一ひとツでない。鬣たてがみに鬣たてがみが

繫つながつて、胴たねに胴たねが重おもなつて、凡おほそ五ご、六間けんがあいだ獸けものの背せである。

咄とつさ嗟さの間かん、散策さんさく子は杖すてっきをついて立たち窘すくんだ。

曲まがり角かどの青大將あおだいしょうと、この傍かたわらなる菜の花なのはなの中の赤棟やまかがし蛇へびと、向

うの馬うまの面つらとへ線せんを引くと、細長こほろい三角形さんかくの只ただ中なかへ、封ふうじ籠かごめられた形かたちになる。

奇怪きがいなる地妖ちようでないか。

しかし、若わか悪あく獸じゆう囿うい繞よう、利牙りげ爪しょう可怖かふも、※蛇がんに及じやぎ蝮ゆうふく

蝎つ、氣毒けどく煙火えんか燃ねんも、薩陀さつた彼か処しこにましますぞや。しばらくして。

……

## 四

のんきな馬士まごめが、此処ここに人のあるを見て、はじめて、のっそり馬の鼻頭はなづらに頭あれた、真正面ましようめんから前後三頭一列に並んで、たらたら下りおをゆたゆたと来るのであつた。

「お待遠まちどおさまでござえます。」

「はあ、お邪魔さまな。」

「御免ごめんなせえまし。」

と三人、一人々々声ひとりひとりをかけて通るうち、流ながれのふちに爪立つまだつまで、細くなつて躲かわしたが、なお大おおなる皮の風呂敷おおいに、目を包まれる心地であつた。

路はみち一際ひときわ細くなつたが、かえつてやわら柔かに草を踏んで、きりきりはたり、きりきりはたりと、のどか長閑な機はたの音に送られて、やがてしさい仔細なく、あおぞら蒼空の樹この間漏る、石段もとの下に着く。

この石段は近頃すっかり修復が出来た。(従つて、つまさき爪尖のぼりの路も、草が分れて、一ひとすじ筋明らさまになつたから、もう蛇も出まい、)その時分は大破して、ちようつくろ丁ど繕いにかかろうという折から、馬はこの段したの下に、一軒、寺というほどでもない住じゆうしよく職の控ひかえや家がある、その背戸せどへ石を積んで来たもので。

段のぼを上ると、階子はしごが揺ゆれはしまいかと危あやぶむばかり、角かどが欠け、石が抜け、土が崩れ、足許も定まらず、よろけながら攀よじ上のぼつた。見る見る、目の下の田畠たはたが小さくなり遠くなるに従うて、波の色

が蒼あおう、ひたひたと足許あしごに近づくのは、海うみを抱いだいたかかる山の、  
何処いずこも同じ習ならいである。

樹こだ立ちに薄暗うすい石段いしだんの、石いしよりも堆うずたかい青苔あおこけの中に、ああの螢ほたる  
袋ぶくろという、薄うすむらさき紫むらさきの差俯さしうつむ向むかいた桔梗科ききようの花はなの早咲はやざきを見  
るにつけても、何となく湿しめっぽい氣きがして、しかも湯滝ゆたきのあとを  
踏むふように熱く汗あせばんだのが、颯さつと一風ひとかぜ、ひやひやとなつた。

境内けいだいはさまで広くない。

尤ももつと、御堂みどうのうしろから、左右さゆうの廻廊かいろうへ、山やまの幕まくらを引廻ひきまわし  
て、雑木ぞうきの枝えだも墨染すみぞめに、其処そことも分わかず松風まつかぜの聲こゑ。

渚なぎさは浪なみの雪ゆきを敷しいて、砂すなに結むすび、巖いわに消いえる、その都度つど音ねも聞き  
えそう、但残ただのこりおし惜おしいまでびたりと留やんだは、きりはたり機はたの音ね。

此処こゝよりして見てあれば、織姫おりひめの二人の姿は、菜種なたねの花の中  
 ならず、蒼海原あおうなばらに描かれて、浪うかに泛うかぶらん風情ふぜいぞかし。

いや、参詣おまいりをしましょう。

五段きざはしえんの階、縁きざの下を、馬が駈け抜けそうに高いけれども、欄らんか

干んは影とども留めない。昔はさこそと思われた。丹塗にぬりの柱、花狭間はなはざま

、梁うづばりの波なみの紺こんじよう青あおも、金色こんじきの竜りゆうも色さみしく、昼ひるの月つき、茅かや

を漏もりて、唐戸からどに蝶ちようの影かげさす光景ありさま、古ふるき土佐とさ絵えの画面かめんに似て、

しかも名工なこうの筆意ひつゐに合あひ、眩まぼゆからぬが奥床おくゆかしゆう、そぞろに

尊なつかく懐なつかしい。

格子こうしの中なかは暗くらかつた。

戸張とばりを垂たれた御厨子みずしの傍わきに、造花つくりばなの白蓮びやくれんの、気高おもかげく梯はし

立つに、頭こうべを垂れて、引退ひきしりぞくこと二、三尺。心静かに四辺あたりを見た。

合ごうてんじよう天井なる、紅々こうこう白々はくはく牡丹の花、胡粉ごふんの涕消え残り、紅も散留ちりとまつて、あたかも刻きざんだものの如く、髻髯ほうふつとして夢に花園はなぞのを仰あおぐ思いがある。

それら、花にも台うてなにも、丸柱まるばしらは言うまでもない。狐格子きつねごうし、唐戸からど、桁けたう、梁つばり、すもの此処ここ彼処かしこ、巡拜じゆんぱいの札ふだの貼りつけてないのは殆どない。

彫金ほりきんというのがある、魚政うおまさというのがある、屋根安やねやす、大工だいこう鉄てつ、左官金さかんきん。東京の浅草あさくさに、深川ふかがわに。周防国すおうのくに、美濃みの、近江うみ、加賀かが、能登のと、越前えちぜん、肥後ひごの熊本、阿波あわの徳島。津々つづ浦うら

うら  
 々の渡鳥わたりどり、稲負いなおせ鳥どり、閑古鳥かんこどり。姿は知らず名を留とめた、  
 一切の善男子ぜんなんし善女人ぜんによにん。木賃きちんの夜寒よさむの枕まくらにも、雨の夜の苦船とまぶね  
 からも、夢はこの処ところに宿るであろう。巡礼じゆんれいたちが靈魂たましいは時々此  
 処こに来て遊あそぼう。……おかし、一軒一枚の門札もんふだめくよ。

五

一座の靈地れいちは、渠かれらのためには平等びようどうりやく利益たのし、楽たのしく美しい、花  
 園である。一度詣もうでたらんほどのものは、五十里、百里、三百里、  
 筑紫つくしの海の果はてからでも、思いさえ浮うんだら、束つかの間に此処ここに来て、  
 虚空こくうに花降はなふる景色を見よう。月に白衣びやくえの姿も拝まがもう。熱あるも



のは、楊柳ようりゆうの露したたりの滴したたりを吸うであらう。恋するものは、優柔しなやか  
 な御手みてに縋すがりもしよう。御胸おんむねにも抱いだかれよう。はた迷える人は、  
 緑いらかの蕘あけ、朱たまがきの玉垣たまがき、金銀しゅらんかんの柱め、朱欄め干のうきぎ、瑪瑙はなからどの階はなからど、花唐戸はなからど。  
 玉楼ぎよくろう金殿きんでんを空想きんして、鳳凰ほうおうの舞たつう竜みやいの宮居みやいに、牡丹ぼたんに遊ふぶ  
 麒麟きりんを見ながら、獅子王ししおうの座ざに朝日影あさひかげさす、桜ふすまの花はなを衾ふすまとして、  
 明月めいげつの如ごとき真珠まゝを枕まくらに、勿もつ体たいなや、御添おんそい臥ぶしを夢見ゆめみるかも知  
 れぬ。よしそれとても、大慈大悲だいじだいひ、觀世音かんぜおんは咎とがめ給たまわぬ。  
 さればこれなる彫金ほりきん、魚政うおまさはじめ、此処ここに靈魂たまの通かよう証あかし拠かた  
 には、いづれも巡じゆんぱい拜はいの札ふだを見ただけで、どれもこれも、女おんな  
 名前なまえのも、ほぼその容貌ようばうと、風采ふうさいと、従したがつてその挙動きやうどうまでが、  
 朦朧もうろうとして影かげの如ごとく目に浮うぶではないか。

かの新聞で披露ひろうする、諸種の義捐金ぎえんきんや、建札たてふだの表に揭示ひようする寄附金の署名が写真である時に、これは理想であるといつても可よからう。

微笑ほほえみながら、一枚ずつ。

扉おおきの方へうしろ向けに、大な賽銭箱さいせんばこのこなた、薬研やげんのような破目われめの入った丸柱まるばしらを視ながめた時、一枚懐紙かいしの切端きれはしに、すらすらとした女文字おんなもじ。

うたゝ寐ねに恋しき人を見てしより

夢てふものは頼みそめてき

—— 玉脇たまわきみを ——

と優やさしく美うつくしく書いたのがあつた。

「これは御参詣で。もし、もし、」

はツと心付くと、麻あさの法衣ころもの袖そでをかさねて、出家しゅつげが一人、裾す

そみじか

短たに藁草履わらぞうり

を穿はきしめて

間近まぢかに来ていた。

振りむ

振向ふりむいたのを、

莞爾にこやかに

笑えみ迎えて、

「些ちつとこちらへ。」

賽銭箱さいせんばこの傍わきを

通とつて、格子戸こしがらに

及および腰こし。

「南無なむ」

とあとは口くちの裏うらで

念ねんじながら、左右さゆうへかたかたと

静しずかに開

けた。

出家しゅつげは、真直まつすぐに

御廚子みずしの前まへ、

かさかさと袈裟けさを

ずらして、袂たもと

からマツチを出す

と、伸のびあが

上あつて御蠟おろうを

点ひじ、額ひたいに

掌あしを合あわせた

が、引返ひきかえ

してもう一枚、

彳たたず

んだ人の前まへの戸かどを開あけた。

虫ぼんだが一段高く、かつ幅の広い、部厚ぶあつな敷居しきいの内に、縦に  
 よじよう四畳ばかり敷かれる。壁の透間すきまを樹蔭こかげはさすが、縁へりなしの畳たたみは  
 青々あおあおと新しかった。

出家は、上なんに何にもない、小机こづくえの前に坐つて、火入ひいればかり、  
 煙草たばこなしに、灰のくすぼつたのを押出おしだして、自分も一膝ひとひざ、こな  
 たへ進め、

「些ちつとお休み下さい。」

また、かさかさたもとと袂たもとを探つて、

「やあ、マッチは此処ここにもござつた、ははは、」  
 と、も一ツ机ひとの下から。

「それではお邪魔を、ちよつと、拝借。」

とこなたは敷居越しきいごしに腰をかけて、此処ここからも空に連なる、海の色より、より濃こまやがすみな霞を吸った。

「真個ほんどに、結構おどろな御堂ですな、佳いい景色じゃありませんか。」

「や、もう大破たいはでござつて。おもりをいたす仏様に、こう申し上げては済まんではありませんがな。ははは、私わたくしちから力ちからにもおいそれとは参りませんので、行届ゆきとどかんがちでございますよ。」

## 六

「随分ずいぶん御参詣ごさんぎはありますか。」

先ず差さしあた当あたり言うことはこれであつた。

出家はうなず頷くようにして、机の前に座を斜めに整然と坐り、

「さようでございます。御ご繁昌と申したいであります、当節

は余りござりません。以前は、莊そうごん嚴美麗結構なものでありまし

たそうで。

貴あなた下、今お通りになりましてございましょう。此ここ処からも見え

ます。この山の裾すそへかけまして、ずつとあの菜種なたね畠ばたけの辺あたり、七

堂うがらん伽藍建連たてつらなつておりましたそうで。書物かきものにも見えますが、

三浦郡みうらごおりの久能谷くのやでは、この岩殿寺いわとでらが、土地の草分くさわけと申しま

する。

坂東ばんどう第二番の巡拜所じゆんぱいじよ、名高い靈場れいじようでございしますが、

唯今ただいまではとんとその旧跡きゆうせきとでも申すようになりました。

みよう  
 妙なもので、かえつて遠国えんごくの衆しゅうの、参詣さんぎが多うございます。

近くは上総かずさ下総しもづき、遠い処とこは九州西国さいこくあたりから、聞伝ききつたえて

巡礼じゆんりなさるのがあります処とこ、この方かたたちが、当地当地へござつて、こ

の近辺きんぺんで聞かれますると、つい知らぬものが多くて、大きに迷う

なぞと言う、お話しを聞くでございますよ。」

「そうしたもんです。」

「ははは、如何いかにも、」

と言つてちよつと言葉が途切とぎれる。

出家こつぱの言いは、聊いささか寄附金かんにげの勸化かんげのように聞えたので、少し氣に

なつたが、煙草たばこの灰あしを落おそうとして目に留とまつた火入ひいれの、いぶり

くすぶつた色いろあい、マッチの燃もえさしの突つ込み加減かげん。巢鴨すがも辺へんに弥み

らく  
 勒の出世を待っている、真宗しんしゅうだい大学の寄宿舎がくに似て、余り世しよた  
 帯いげ気がありそうもない処ところは、大おおに胸襟きょうきん襟きんを開いてしかるべく、  
 勝手に見て取つた。

そこでまた清すがすが々がしく一ひとすい吸いして、山の端はの煙を吐くこと、遠と  
 見おみの鉄拐てつかいの如く、

「夏はさぞ涼すずしいでしょう。」

「とんと暑さ知らずでござる。御堂おどうは申すまでもありません、下  
 かりかり庵あん室じつなども至極しごくその涼すずしいので、ほんの草葺くさぶきでありますが、  
 些ちと御帰りがけにお立寄たちより、御休息なさいまし。木葉きはを燻くすべて渋し  
 茶ぶちやでも献じましょう。

荒れたものでありますが、いや、茶釜ちやがまから尻尾しっぽでも出ましょ



うなら、またいっきよう興でござる。はははは、

「お羨うらやましい御境涯ごきようがいですな。」

と客は言つた。

「どうして、貴下あなた、さように悟りの開けました智識ちしきではございません。一軒屋ひとりずまいの一人住居心寂しゆうござつてな。唯ただいま今も御参詣のお姿を、あれからお見受け申して、あとを慕つて来ましたほどで。

時に、どちらに御逗留ごとうりゆう？」

「私わたし？ 私は直じきその停車場最寄ステーションもよりの処ところに、」

「しばらく、」

「先々せんせんげつ月あたりから、」

「いずれ、御旅館で、」

「否いいえ、一室借りましたひとまして自炊じすいです。」

「は、は、さようで。いや、不躰ふしつけでありますが、思召おぼしめしが

ござつたら、仮庵室御用かりあんじつにお立て申します。

甚はなはだ唐突とうとつでありますはなはが、昨年夏も、お一人な、やはりかよ

うな事から、貴下あなたがたのような御仁ごじんの御宿おやどをいたしたことがあり

ます。

御夫婦ごふうふでも宜よろしい。お二人ぐらいは楽らくでありますから、

「はい、ありがとうございます。」

と莞爾にっこりして、

「ちよつと、通りがかりでは、こういう処ところが、こちらにあらうと

は思われませぬね。ほんとう真個に佳いい御堂ですな、

「折々御遊歩ごゆうほにおいで下さい。」

「勿もつた体たいない、おまいりに来ましよう。」

何なに心ごころなく言いつた顔かほを、訝いぶしそうに打うち視ながめた。

## 七

出家は膝ひざに手てを置おいて、

「これは、貴あなた下がた方の口くちから、そういうことを承うけらうとは思わん

でありました。」

「何なに故げですか、」

と問うては見たが、あらかじ予め、その意味を解するに難かうはないのであつた。

出家も、ひらた扁くはあるが、ふつくりした頬えみに笑を含んで、

「何故なぜと申すでもありませんがな……先ず当節のお若い方が……

というのでござる。はははは、近い話もつとがな。最もそう申すほど、

私わたくしが、まだ年配ではありませんけれども、」

「分りましたとも。青年の、しかも書しよせい生が、とおっしゃるのでしよう。」

否いいえ、そういう御遠慮をなさるから、それだから不可いけません。そ

れだから、」

とどうしたものか、じりじりと膝を向け直して、

「段々お宗旨しゅうしが寂さびれます。こちらは何なにもお宗旨しゅうしだか知りませんが、  
 対あいて手は老朽おいくちたものだけで、年とし紀の少すくない、今の学校生活でもし  
 たものには、とても済さい度はむざずかいしい、今さら、観かん音おんでもある  
 まいと言うようなお考えだから不可いかんです。

近頃は爺婆じじばばの方が横おう着ちやくで、嫁をいじめる口叱くちご言ごを、お  
 念仏くとうで句読くとうを切つたり、膚はだ脱ぬぎで鰻うなぎの串くしを横よこ銜ぐわえで題目とを唱となえ  
 たり、……昔からもそういうものもなかったんじやないが、まだま  
 だ胡散うさんながら、地獄じごく極ごく楽らくが、いくらか念頭ねんずにあるうちは始末しまつが  
 よかつたのです。今じゃ、生なま悟さとりに皆みんなが悟さとりを開いた顔で、悪  
 くすると地獄の絵を見て、こりや出来が可いい、などと言い兼ねま  
 せん。

貴<sup>あなた</sup>下方<sup>がた</sup>が、到底<sup>あいて</sup>対<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>にやなるまいと思<sup>お</sup>つてお<sup>い</sup>でな<sup>さ</sup>る、少<sup>わか</sup>い人<sup>ひと</sup>たちが、かえつて祖<sup>そ</sup>師<sup>し</sup>に憧<sup>あこ</sup>がれてます。どうかして、安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>立<sup>り</sup>命<sup>つめい</sup>が得<sup>え</sup>たいと悶<sup>もだ</sup>えてますよ。中にはそれがために氣<sup>き</sup>が違<sup>ちが</sup>うものもあり、自殺<sup>じそく</sup>するものさえあるじやありませんか。

何でも構<sup>かま</sup>わない。途中<sup>ちゆうちゆう</sup>で、ははあ、これが二十世紀<sup>にじゅうにせいき</sup>の人間<sup>にんげん</sup>だな、と思う<sup>おも</sup>うのを御<sup>ご</sup>覧<sup>らん</sup>なすつたら、男<sup>おとこ</sup>子<sup>こ</sup>でも女<sup>おんな</sup>子<sup>な</sup>子<sup>こ</sup>でもです<sup>ね</sup>、唐<sup>たう</sup>突<sup>とく</sup>に南<sup>なん</sup>無<sup>む</sup>阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>と声<sup>こゑ</sup>をかけてお試<sup>し</sup>しなさい。すぐ<sup>すぐ</sup>に氣<sup>き</sup>絶<sup>ぜつ</sup>するものがあ<sup>る</sup>かも知<sup>し</sup>れず、たちどころに天<sup>あたま</sup>窓<sup>まど</sup>を剃<sup>そつ</sup>て御<sup>ご</sup>弟<sup>てい</sup>子<sup>し</sup>になり<sup>たい</sup>と言<sup>い</sup>お<sup>う</sup>も知<sup>し</sup>れず、ハタと手<sup>て</sup>を拍<sup>う</sup>つて悟<sup>ご</sup>るの<sup>も</sup>ありま<sup>し</sup>よう。ある<sup>い</sup>は<sup>それ</sup>が基<sup>もと</sup>で死<sup>し</sup>にた<sup>く</sup>なるもの<sup>も</sup>ある<sup>か</sup>も知<sup>し</sup>れませ<sup>ん</sup>。

實際<sup>じつじ</sup>、串<sup>じょうだん</sup>戲<sup>げん</sup>では<sup>な</sup>い。その<sup>く</sup>ら<sup>い</sup>な<sup>ん</sup>です<sup>も</sup>の。仏<sup>ぶつ</sup>教<sup>きやう</sup>はこ

れから法燈ほうとうの輝く時です。それなのに、何故か、貴下あんたがたが因循いんじゆんして引込思案ひっこみじあんでいらつしやる。」

頻しきりに耳を傾けたが、

「さよう、如何いかにも、はあ、さよう。いや、私わたくしどもとても、堅く

申せば思想界は大維新だいいしんの際さいで、中には神を見た、まのあたりぶつ仏

に接した、あるいは自みずから救世主であるなどと言う、当時の熊本

の神風連じんふうれんの如ごとき、一揆いっきの起りましたような事も、ちらほら聞き

伝たえてはおりますが、いずれに致せ、高尚な御議論、御研究の

方ほうでござつて、こちとらづれ出家がお守もりをする、偶像などは…

…その、」

と言いかけて、密そつと御廚子みずしの方かたを見た。

「作さくがよければ、美術品、彫刻物ちようこくものとして御覧なさろうと言う世間。

あるいは今後、仏教は盛さかんになろうも知れませんが、ともかく、

偶像の方となりますると……その如何いかがなものでござらうかと……  
おなじ同一信仰にいたしてからが、御本尊ごほんぞんに対し、礼拝らいはいと申す方は、

この前まへどうあろうかと存じます。ははは、そこでございますか  
 ら、自然、貴下あたたがたには、仏教、即ち偶像教でないように思召おぼしめ  
おすがたしが願いたい、御像おすがたの方は、高尚な美術品を御覧になるように、

と存じて、つい御遊歩ごゆうほなどと申すような次第でございますよ。」

「いや、いや、偶像でなくつてどうします。御姿おすがたを拝まないで、  
 何を私わたしたちが信ずるんです。貴下あなた、偶像とおつしやるから不可いかん。



名がありましたしょう、一体ごとくに。  
 釈迦しやか、文殊もんじゆ、普賢ふげん、勢至せいし、観音かんおん、皆、名があるではありませんか。」

## 八

「唯ただ、人と言えは、他人です、何でもない。これに名がつきましよう。名がつきますと、父となります、母となり、兄となり、姉となります。そこで、その人たちを、唯ただ、人にして扱いますか。偶像どういつも同一どういつです。唯ただ偶像なら何でもない、この御堂かみだうのは観世かんぜお音んです、信仰しんぎやうをするんでしよう。」

じゃ、偶像は、木、金、乃至、土。それを金銀、珠、玉で飾り、色彩を装つたものに過ぎないと言うんですか。人間だって、皮、血、肉、五臓、六腑、そんなもので束ねあげて、これに衣ものを着せるんです。第一貴下、美人だって、たかがそれまでのものだ。

しかし、人には靈魂がある、偶像にはそれが無い、と言うかも知れん。その、貴下、その貴下、靈魂が何だか分からないから、迷いもする、悟りもする、危みもする、安心もする、拝みもする、信心もするんですもの。

的がなくて弓の修業が出来ますか。軽業、手品だって学ばねばならんです。

偶像は要いらないと言う人に、そんなら、恋人は唯ただ慕う、愛する、こがるるだけで、一緒にならんでも可いいのか、姿を見んでも可いいのか。姿を見たばかりで、口を利かずとも、口を利いたばかりで、手に縋すがらずとも、手に縋すがただけで、寝ないでも、可いいのか、と聞いて御覧なさい。

せめて夢にでも、その人に逢あいたいのが実情です。

そら、幻にでも神かみほとけ 仏を見たいでしょう。

釈迦しやか、文殊もんじゆ、普賢ふげん、勢至せいし、観音かんおん、御像おすがたはありがたい訳わけで

はありませんか。―

出家は活いきいき々とした顔になって、目の色が輝いた。心の籠こもった

口のあたり、髯ひげの穴も数えつびよう、

「申されました、おもしろい。」

ぴたりと膝に手をつけて、片手を額ひたいに加えたが、

「——うたゝ寐ねに恋しき人を見てしより夢ゆめてふものはたのみそめ

てき——」

と独り俯ひと向うつむいた口の裏うちに誦じゆしたのは、柱しらに記しるした歌である。

こなたも思おわず彼か処しこを見た、柱しらなる蜘蛛ささの糸がに、あざやかなり

けり水みづ茎ぐきの跡。

「そう承うけたまわれば恥はじ入いる次第しだいで、恥はじを申まさねば分わらんでありますが、

うたゝ寐ねの、この和歌わがでござる、」

「その歌が、」

とこなたも膝の進むすすむを覚おぼえず。

「ええ、御覧なさい。そこらじゆう 其処中、それ巡じゆんぱい拜札を貼り散らしたと申すわけで、中にはな、売薬や、何かの広告に使いまするそうなが、それもありきたりで構わんであります。

また誰たれが何時いつのまに貼つて参るかも分りませんので。ところが、それ、其処そこの柱の、その……」

「はあ、あの歌ですか。」

「御覧になつたで、」

「先刻さつき、貴下あなたが声をおかけなすつた時に、」

「お目に留とまつたのでありませんよう、それは歌の主ぬしが分つております。」

「婦人ですな。」

「さようで、最も古歌もつとこかでありますそうで、小野小町の、」

「多分もつとそのようですよ。」

「詠よまれたは御自分でありませんが、いや、丁とんとその詠よみ主ぬしのよ  
うな美人でありましてな、」

「この玉脇たまわき……とか言う婦人が、」

と、口では澄すましてそう言ったが、胸はそぞろに時ときめいた。

「なるほど、今貴下あなたがお話しになりました、その、御像おすがたのこと  
について、恋人云々うんぬんのお言葉を考えて見ますと、これは、み

だらな心ではのうて、行き方ゆかたこそ違ちがいまするが、かすかに照らせ  
山やまの端はの月、と申したように、観世音かんぜおんにあこがるる心を、古歌  
に擬なぞらえたものであつたかも分りませぬ。——夢てふものは頼み

初めてき——夢になりともお姿をと言う。

真個まことに、ああいう世よに稀まれな美人ほど、早く結縁けちえんいたして仏果ぶつかを得たためし駿たくさんも沢山たくさんございますから。

それを大おおづかみ掴つかに、恋歌こいかを書き散らして参つた。怪けしからぬ事と、さ、それも人によりけり、御経おきようにも、若有女人にやくうによにんせつよくぐ設欲求男なん、とありまするから、一いちがい概とがに咎め立てはいたさんけれども。

あれがために一人殺したでござります。」

聞くものは一いっきよう驚きつを吃きつした。菜の花に見た蛇のそれより。

## 九

「まさかとお思いなさるでありましょう、お話が大分唐突だしぬけでござつたで、」

出家は頬に手をあてて、俯うつむいてやや考え、

「いや、しかし恋歌こいかでないといたして見ますると、その死んだ人ほうの方が、これは迷いであつたかも知れんでございます。」

「飛んだ話じやありませんか、それはまたどうした事ですか。」

と、こなたは何時いつか、もう御堂おどうの畳ふしに、にじり上あがつていた。よしありげな物語を聞くのに、懐ふしが窮きゆう屈くつだつたから、懐かい中ちゆうに押おし込んであつた、鳥打帽とりうちぼうを引出して、傍かたわらに差置さしおいた。

松風が音ねに立つた。が、春の日なれば人よりも軽く、そよそよと空を吹くのである。



出家は仏前の燈明をちよつと見て、

「さればでござつて。……」

実は先刻お話申した、ふとした御縁で、御堂のこの下の仮庵室へお宿をいたしました、その御仁なのでありますが。

その貴下、うたゝ寝の歌を、其処へ書きました、婦人のために……まあ、言つて見ますれば恋煩い、いや、こがれ死をなすつたと申すものでございます。早い話が、

「まあ、今時、どんな、男です。」

「丁ど貴下のような方で、」

呀？ 茶釜でなく、這般文福和尚、渋茶にあらぬ振

舞の三十棒、思わず後に瞠若として、……唯苦笑す

るある而已……

「これは、飛んだ処へ引合いに出しました、」

と言つて打笑い、

「おつしやる事と申し、やはりこういう事からお知己になつたと申し、うっかり、これは、」

「否、結構ですとも。恋で死ぬ、本望です。この太平の世に生れて、戦場で討死をする機会がなけりや、おなじ畳の上で死ぬものを、憧れじに洒落ています。」

華族の金満家へ生れて出て、恋煩いで死ぬ、このくらいありがたい事はありますまい。恋は叶う方が可さそうなもんです、が、そうすると愛別離苦です。

唯<sup>ただ</sup>死ぬほど惚<sup>ほ</sup>れるというのが、金<sup>かね</sup>を溜<sup>た</sup>めるより難<sup>かた</sup>いんでしよう。

「」

「真<sup>まこと</sup>に御串戲<sup>ごじょうだん</sup>ものでおいでなさる。はははは、」

「真面目<sup>まじめ</sup>ですよ。真面目<sup>まじめ</sup>だけなお串戲<sup>じょうだん</sup>のように聞えるんです。

あやかりたい人ですね。よくそんなのを見つけましたね。よくそんな、こがれ死<sup>しに</sup>をするほどの婦人が見つかりましたね。」

「それは見ることは誰にでも出来ます。美しいと申して、竜<sup>りゅうぐ</sup>

宮<sup>みや</sup>や天<sup>てん</sup>上<sup>じょう</sup>界<sup>かい</sup>へ参<sup>ま</sup>らねば見<sup>み</sup>られないのではござらんで、」

「じゃ現在<sup>げんざい</sup>いるんですね。」

「おりますとも。土地<sup>ちど</sup>の人<sup>ひと</sup>です。」

「この土地<sup>ちど</sup>のですかい。」

「しかもこの久能谷くのやでございます。」

「久能谷の、」

「貴下あなた、何んでございましょう、今日此処ここへお出でなさるには、

その家の前うちを、御通行おとおりになりましたらうで、」

「その美人の住居すまいの前をですか。」

と言う時、機はたを織わかった少い方おんなの婦人が目に浮んだ、赫耀かくようとし

て菜の花に。

「……じゃ、あの、やっぱり農家の娘で、」

「否いやいや々々、大財産家だいざいさんかの細君でございます。」

「違ちがいました、」

と我を忘れて、眩つぶやいたが、

「そうですか、大財産家おおかねもちの細君こがらですか、じゃもう主ぬしある花はななんです  
ね。」

「さようでございます。それがために、貴下あなた、」

「なるほど、他人たにんのものですね。そうして誰たれが見ても綺麗きれいですか、  
美人びじんなんですかい。」

「はい、夏なつ向むきは随ずい分ぶん何千人なんせんという東京とうきょうからの客人きやくにんで、目の覚  
めるような美麗びれいな方かたもありまするが、なかなかこれほどのはない  
でございます。」

「じゃ、私わたしが見ても恋こい煩わずらいをしそうですね、危険けんのん、危険けんのん。  
」。

出家しゅがいは真面目まじめに、

「何故でございますか。」

「帰路には気を注げねばなりません。何処ですか、その財産家の家は。」

## 十

菜種にまじる茅家のあなたに、白波と、松吹風を右左り、其処に旗のような薄霞に、しつとりと紅の染む状に桃の花を彩つた、その屋の棟より、高いのは一つもない。

「角の、あの二階家が、」

「ええ？」

「あれがこの歌のかき人の住居でござつてな。」

聞くものは慄然とした。

出家は何んの気もつかずに、

もつとあすこ

「尤も彼処へは、去年の秋、細君だけが引越して参つたので。丁

ど私がお宿を致したその御仁が……お名は申しますまい。」

「それが可うございます。」

「唯、客人——でお話をいたしましたでしょう。その方が、庵室に逗

留中、夜分な、海へ入つて亡くなりました。」

「溺れたんですか、」

「と……まあ見えるでございます、亡骸が岩に打揚げられてご

ざつたので、怪我が、それとも覚悟の上か、そこは先ず、お聞取

りの上の御推察でありますが、私は前申す通り、この歌のためじやようにな、」

「何しろ、それは飛んだ事です。」

「その客人が亡くなりまして、一二月ばかり過ぎてから、彼処へ

、

と二階家の遥はるかなのを、雲の上から蔽おおうよう、出家は法衣ころもの袖そでを

上げて、

「細君が引越して来ましたので。恋じや、迷まよいや、という一ひと騒さわ

ぎござった時分は、この浜はま方がたの本宅たなに一ひと家族たな、……唯ただ今いまでも

其そこ処こが本家、まだ横浜にも立派な店があるものでありまして、主人

は大方おおかたその方ほうへ参まゐつておりましようが。



この久能谷の方は、女中ばかり、真まことに閑静に住んでおります。」

「すると別荘なんですね。」

「いやいや、——どうも話がいろいろになります、——ところが久能谷の、あの二階家が本宅じゃそうで、唯今の主人も、あの屋根の下で生れたげに申します。」

その頃は幽かすかな暮しで、屋根と申した処ところが、ああではありますまい。月も時雨しぐれもばらばらぶき草。それでも先代の親仁おやしと言うのが、もう唯今では亡くなりましたが、それが貴下あなた、小作人ながら大の節し儉家まつやで、積年の望みで、地面を少しばかり借りましたのが、私わたくし庵あん室むろの背戸せどの地続きで、以前立派な寺がありました。その住じゆうし職よくの隠居所いんきよじよの跡だったそうにございますよ。

豆を植えようと、まことにこう天氣の可い、のどかな、陽炎

がひらひら畔あぜに立つ時分。

親仁殿おやじどの、鋤くわをかついで、この坂下へ遣やつて来て、自分の借しゃく

地ちを、先まずならしかけたのでございます。

とツ様ひるあが昼上りにせつせえ、と小兒こどもが呼びに來た時分、と申す

で、お昼頃でありましような。

朝疾とくから、出しなには寒かつたで、布子ぬのこの半纏はんてんを着ていた

のが、その陽気なり、働き通しじや。親仁殿は向むこう願はちまき卷おおは、大

肌脱だぬぎで、精々せつせつと遣やつていた処ところ。大抵たいてい借用分の地券面ちけんめんだけ

は、仕事が済んで、これから些ちとほまちに山を削ろうという料りょう

簡けん。ずかずか山の裾すそを、穿ほりかけていたそうですありますが、小こ

兎どもが呼びに来たについて、一いつぶく服遣るべいかで、もう一ひとくわ鍬、す  
 とんと入れると、急に土が軟やわらかく、ずぶずぶと柄えぐるみにむぐず  
 り込んだで。

ずいと、引抜いた鍬くわについて、じとじと染にじんで出たのが、真ま  
 紅つかな、ねばねばとした水じや、」

「死骸きりこですか、」と切込んだ。

「大違い、大違い、」

と、出家は大きくかぶりを掉ふつて、

「註ちゆうもん文通り、金子かねでござる、」

「なるほど、穿ほりあ当てましたね。」

「穿ほりあ当てました。海の中でも紅べに色の鱗うろこは目覚めざましい。土を穿ほつて出

る水も、そういう場合には紫より、黄色より、青い色より、その  
 紅色が一番見る目を驚かせます。

はて、何んであろうと、親仁殿おやじどのが固くなつて、もう二、三度  
 穿ほり抜げると、がつくり、うつろになつたので、山の腹へ附くっ着い  
 て、こう覗のぞいて見たそうにござる。」

## 十一

「大蛇だいじやが顛あぎとを開あいたような、真紅まっかな土つちの空洞うつつろの中に、づぼらと  
 した黒い塊かたまりが見えたのを、鍬くわの先で搔かきだ出して見ると——甕かめで。  
 蓋ふたが打ぶ欠つかけていたそうでございますが、其処そこからもどろどろと、

その丹色にいろに底澄そこすんで光のある粘土ねばつちのようなものが充満いっぱい。

別に何人ひとにもありませんので、親仁殿おやしどのは惜気おしげもなく打覆ぶつかえし

て、もう一箇ひとつあつた、それも甕かめで、奥の方おくへ縦たてに二ツ並んでいた

と申まをします——さあ、この方が真物ほんものでござつた。

開あけかけた蓋あわを慌おそてて圧おさえて、きよろきよると其処そこらみまわしたそ

うでございますよ。

傍そばにいて覗のぞき込んでいた、自分の小児こどもをさえ、睨にらむようにして、

じろりと見ながら、どう悠々ゆうゆうと、肌はだなぞを入れておられましょ

う。

素肌すはだへ、貴下あなた、嬰兒あかんぼを負おぶうように、それ、脱だいで置いたぼろ

半纏はんてんで、しつかりくるんで、背負しよいあ上げて、がくつく腰くわを、

杖つえにどツこいなじや。黙もくっているよ、何んにも言うな、きつと誰たれにも饒しやべ舌べるでねえぞ、と言いい續つけて、内うちへ歸かえつて、納なんど戸どを閉しめ切きつて暗くらくして、お仏ぶつだん壇だんの前まへへ筵むしろを敷敷いて、其そこ処こへざくざくと装もりあ上あげた。尤もつとも年としが経たつて薄うす黒くろくなつていたそうでありすが、その晩ばんから小屋こやは何なにんとなく暗やみよ夜よにも明あるかつた、と近ちか所ところのものが話はなでござつて。

極ごくしやう性しやうな朱しゆでござつたらう、ぶちまけた甕かめいっばい充ちゆう満まんののが、時ときならぬ曼まん珠じゆ沙しや華げが咲さいたように、山やまぎわ際ぎわに燃もえていて、五さみだれ月げつ雨うになつて消きえましたとな。

些ちつと日ひか数ずが経たつてから、親おや仁にどののは、村むらかた方かたの用ようたし達だちかたがた、東とう京きやうへ参まゐつたついでに芝しばぐち口ぐちの両りやうがえや換か店てんへ寄よつて、汚きたない煙たばこ草いれ入いれ

から煙草の粉だらけなのを一枚だけ、そつと出して、いくらに買  
わつしやる、と当つて見ると、いや抓つまんだ爪つめの方が黄色いくらい  
でござつたに、正しょうのものとして争あわれぬ、七両りょうならば引替ひきかえにと言  
うのを、もつと氣張きばつてくれさつせえで、とうとう七両一分ぶに替  
えたのがはじまり。

そちこち、氣長きながに金子かねにして、やがて船一艘そう、古物ふるものを買い込  
んで、海から薪炭まきすみの荷を廻し、追々おいおい材木へ手を出しかけ、船  
の数も七艘までに仕上げた時、すつぱりと売物に出して、さて、  
地面をかう、店を拡げる、普請ふしんにかかる。

土台が極きまると、山の貸かしもと一元いちげんになつて、坐まつていて商売しょうばいが出来  
ようになりました、高利こうりは貸かします。

どかとした山の林が、あの裸になつては、店さきへすくすくと並んで、いつの間にか金を残しては何処へか参る。

そのはずでござるて。

利のつく金子を借りて山を買う、木を伐りかけ、資本に支える。ここで材木を抵当にして、また借りる。すぐに利がつく、また伐りかかる、資本に支える、また借りる、利でござろう。借りた方は精々と樹を伐り出して、貸元の店へ材木を並べるばかり。追っかけられて見切つて売るのを、安く買い込んでまた儲ける。行つたり、来たり、家の前を通るものが、金子を置いては失せるのであります。

妻子眷属、一時にどしどしと殖えて、人は唯、天狗が山を



飲むような、と舌を巻いたでありますが、蔭<sup>かげ</sup>じゃ——その——  
 鋏<sup>くわ</sup>を杖<sup>つえ</sup>で洞<sup>どう</sup>震<sup>ふる</sup>いの一件をな、はははは、こちとら、その、も一  
 ツの甕<sup>かめ</sup>の朱<sup>しゆ</sup>の方だつて、手を押<sup>おッ</sup>つけりや血になるだ、なぞと、ひ  
 そひそ話<sup>ばなし</sup>を遣<sup>や</sup>るのでござつて、「  
 「そういう人たちはまた可<sup>い</sup>い塩<sup>あん</sup>梅<sup>ばい</sup>に穿<sup>ほ</sup>り当てないもんですよ。」  
 と顔を見合わせて二人が笑つた。

「よくしたものでございます。いくら隠していることでも何<sup>ど</sup>処<sup>こ</sup>を  
 どうして知れますかな。

いや、それについて、「

出家<sup>しゆげ</sup>は思<sup>おも</sup>出<sup>いだ</sup>したように、

「こういう話がございます。その、誰にも言うな、と堅<sup>か</sup>く口<sup>くち</sup>留<sup>ど</sup>め

をされた<sup>せい</sup>のすけ<sup>のすけ</sup>齊之助という小児が、（父様は野良へ行つて、穴のない<sup>てんぼうせん</sup>天保銭をドシコと背負つて帰らしたよ。）

……如何でござる、はははははは。」

「なるほど、穴のない天保銭。」

「その穴のない天保銭が、当主でございます。」

たかくのうぜいぎん  
多額納税議員、

たまわきせいのすけ<sup>たまわきせいのすけ</sup>玉脇齊之助、令夫人おみを殿、その歌をかいた美人であります、  
いかが<sup>いかが</sup>如何でございます、あなた<sup>あなた</sup>貴下、」

## 十二

「先ずお茶を一ツ。御約束通り渋茶でござって、碌<sup>ろく</sup>にお茶<sup>ちやだい</sup>台も

ありませんかわりには、がらんとして自然に片づいております。  
 お寛くつろぎ下さい。秋になりますると、これで町へ遠うございますか  
 わりには、栗柿くりかきに事を欠きませぬ。鳥からすを追つて柿を取り、高音たかねを  
 張ります鴟もずを驚かして、栗を落してなりと差上げましょうに。

まあ、何よりもお楽に、」

と袈裟けさをはずして釘くぎにかけた、障子しょうじに緋桃ひももの影法師かげぼうし。今いまも  
 のがたり物ものがたり 語しゆの朱しゆにも似て、破目やれめを暖あたく燃たゆる状さま、法衣ころもをなぶる風情ふぜい  
 である。

庵室あんじつから打仰うちあおぐ、石の階子はしごは梢こずえにかかつて、御堂みどうは屋根の  
 み浮もいたよう、緑の雲にふつくりと沈しんで、山の裾すその、縁えんに迫せまつ  
 て萌葱もえぎなれば、あま下さがる蚊帳かやの外たれに、誰待たれつとしもなき二人、煙けぶ

らぬ火鉢のふちかけて、ひらひらと蝶ちようが来る。

「御堂おとうの中では何んとなく気もあらたまります。此処ここでお茶をお入れ下すつた上のお話じゃ、結構けつこう過ぎますほどですが、あの歌に分れて来たので、何んだかなごり惜おしい心こころ持もちもします。」

「けれども、石段だけでも、婀娜あだな御本尊ごほんぞんへは路みちが近うなつてございますから、はははは。

実じつの処ところ仏の前では、何か私わたくしが自分ごんげに懺悔ざんげでもしますように心こころ苦しい。此処ここでありますと大きくつろに寛くつろぐでございます。

師しのかけを七尺しやく去るともうなまけの通りで、困ったものでありますわ。

そこで客人でございます。——

日頃のお話ぶり、行為おこない、御容ごようす子な、」

「どういふ人でした。」

「それは申しますまい。私も、盲目めくらの垣かき覗のぞきよりもそツと近い、  
机つくえ覗のぞきで、読んでおいでなさった、書物しょもつなどの、お話うかがも伺つつて、何をなさる方じやと言う事も存じておりますが、経き文ようもんに  
書いてあることさえ、愚昧ぐまいに饒舌しゃべると間違まちがいます。」

故人をあやまり伝えてもなりません、何か評ひょうをやるようにも当  
りますから、唯々ただただ、かのな、婦人との模様だけ、お物語りしま  
しように。

あるあるひばんがた、極暑ごくしょのみぎりでありました。浜の散歩から返つ  
てござつて、(和尚おしょうさん、些ちつと海へ行つて御覧ごらんなさいませんか。

綺麗な人がいますよ。」

（ははあ、どんな、貴下、）

（あの松原の砂路から、小松橋を渡ると、急にむこうが遠目金を嵌めたように円い海になって富士の山が見えますね、）

これは御存じでございましょう。」

「知っていますとも。毎日のように遊びに出ますもの、」

「あの橋の取附きに、松の樹で取廻して——松原はずつと河を越して広い洲の林になっておりますな——そして庭を広く取つて、大玄関へ石を敷詰めた、素ばらしい門のある邸がございまして。う。あれが、それ、玉脇の住居で。」

実はあの方を、東京の方がなざる別荘を真似て造つたであります

すが、主人が交際つきあいずきで頻しきりと客をしまする処ところ、いずれ海が、何よりの呼物よびものでありますに。この久能谷くのやの方は、些ちつと足場あしばが遠くになりますから、すべて、見得みえかざり装飾を向うへ持つて参つて、小松こまつば橋しが本宅のようになっております。

そこで、去年の夏頃は、御新姐ごしんぞ。申すまでもない、そちらにいたでございます。

でその——小松橋を渡ると、急に遠目とおめがね金を覗のぞくような円まるい海がらすの硝子がらすへ——ぱつと一杯うつつに映つて、とき色の服の姿が浪なみの青いのと、巔いただきの白い中へ、薄い虹にじがかかったように、美しく靡なびいて来たのがある。……

と言われたは、即ちすなわ、それ、玉脇たまわきの……でございます。

しかし、その時はまだ誰だか本人も御存じなし、聞く方でも分りませぬので。どういう別嬪べっぴんでありました、と串戯じょうだんにな、  
 団扇うちわで煽あおぎながら聞いたでございませぬ。

客人は海水帽を脱いだばかり、まだ部屋へも上あがらず、その縁えんが  
 側わに腰をかけながら。

(誰方どなたか、尊とうといくらいでした。)

### 十三

「大分だいぶん気高く見えましたな。

客人が言うには、



(二、三間<sup>げん</sup>あいを置いて、おなじような浴衣<sup>ゆかた</sup>を着た、帯<sup>きちん</sup>を整然と結んだ、女中と見えるのが附いて通りましたよ。

唯<sup>ただ</sup>すれ違いざまに見たんですが、目鼻立ちのはつきりした、色の白いことと、唇<sup>あか</sup>の紅さつたらありませんでした。

盛装という姿だのに、海水帽をうつむけに被<sup>かぶ</sup>つて——近所の人でもあるように、無造作に見えましたつけ。むこう、そうやって下を見て帽子<sup>ひさし</sup>の廂で日を避<sup>よ</sup>けるようにして来たのが、真<sup>ま</sup>直<sup>すく</sup>に前へ出たのと、顔を見合わせて、両方へ避<sup>さ</sup>ける時、濃<sup>まっ</sup>い睫毛<sup>まげ</sup>から瞳<sup>ひとみ</sup>を涼<sup>みひら</sup>しく睜<sup>みひら</sup>いたのが、雪<sup>せつ</sup>舟<sup>しゆう</sup>の筆<sup>すずり</sup>を、紫<sup>むら</sup>式<sup>さき</sup>部<sup>きぶ</sup>の硯<sup>すずり</sup>に染めて、濃淡のぼかしをしたようだった。

何んとも言えない、美しさでした。

いや、こういうことをお話します、わたしとばえ私は鳥羽絵にに肖にているかも知れない。

さあ、御飯ごはんを頂ういて、柄相がらそう応おうに、月夜の南とうなす瓜す畑ばたけでもまた

見みに出いましようかね。）

そのばん爾の晚ばんは貴あなた下ただ、唯ただそれだけの事ことで。

翌日あしたまた散歩さんぽに出いて、同じ時とき分に庵室あんじつへ帰かえつて見みえましたか

ら、わたくし私わたしが串じょうだん戯たわぶに、

（雪舟の筆ひしは如何いかでござった。）

（今日は曇曇つた所せ為いか見えませんでした。）

それから二、三日た経たつて、

（まだお天あま気が直ちりませんな。些ちと涼ひやしすぎるくらい、御歩おひろい行いに

は宜よろしいが、やはり雲がくれでござったか。)

(否いや、源げんじ氏の題だいに、小松橋こまつばしというのはありませんが、今日はあの橋の上で、)

(それは、おめでたい。)

などと笑います。

(まるで人違いをしたように粹いきでした。私わたしがこれから橋を渡ろうという時、向うの袂たもとへ、十二、三を頭かしらに、十歳とおぐらいのと、七なな八歳はちばかりのと、男おとこの児こを三人連れて、その中の小さいのの肩かたを片手ひとてで敲たたきながら、上うへから覗のぞき込むようにして、莞爾にっこりして橋の上へかかって来ます。

どんな婦人おんなでも羨うらやましがりそうな、すなおな、房ふっさりした花月卷かげつまき

で、薄お納戸地に、ちらちらと膚の透いたような、何んの中ちゆうが形ただか浴衣がけで、それで、きちんとした衣紋附えもんつき。

紹ろでしよう、空色と白とを打合わせの、模様はちよつと分らなかつたが、お太鼓たいこに結んだ、白い方が、腰帯こしおびに当つて水無月の雪みなづきを抱だいたようで、見る目に、ぞツとして擦すれ違ちがう時、その人は、忘れた形なりに手を垂れた、その両手は力なさそうだったが、幽かすかにぶるぶると肩が揺れたようでした、傍そばを通つた男の氣けに襲おそわれたものでしよう。

通とおり縋すがると、どうしたのか、我を忘れたように、私わたしは、あの、低い欄らんかん干へ、腰をかけてしまつたんです。抜けたのだなぞと言つては不可いけません。下は川ですから、あれだけの流れでも、落おっこち

ようもんならそれつきりです——淵ふちや瀬せでないだけに、救助船たすけふねとも喚わめかれず、また叫こゑんだ処ところで、人は串じょうだん戯げんだと思つて、笑つて見殺しにするでしょう、泳およぎを知らないから、）  
 と言つて苦笑にがわらいをしなさつたつけ……それが眞実まことになつたのでございませう。

どうしたことか、この恋煩こいわずらいに限つては、傍はたのものは、あはあは、笑つて見殺しにいたしました。

私わたくしはじめ串じょうだん戯げん半分はんぶん、ひやかしかたがた、今日こんにちは例れいのは如何いかで、などと申まをしたのでございませう。

これは、貴下あなたでもさようでありませう。「  
 されば何んと答えよう、喫のんでた煙草たばこの灰あしをはたいて、

「ですがな……どうも、これだけは真面目に介抱は出来かねます。娘が煩うのだと、乳母が始末をする仕来りになつておりますがね、男のは困りますな。」

そんな時、その川で沙魚でも釣っていたかたですわね。」

「ははは、これはおかしい。」

と出家は興ありげにハタと手を打つ。

## 十四

「これはおかしい、釣といえは丁どその時、向う詰の岸に踞んで、ト釣っていたものがあつたでござる。橋詰の小店、荒物を商う

家の亭主で、身体からだの瘦やせて引ひ緊つつたには似にない、禪ぜんの緩ゆるい男で、因果いんがとのべつ釣つをして、はだけていましょう、真まにことあぶなツかし  
い形かたちでな。

渾あだ名なを一いち厘もん土かわ器らけと申ますでござる。天あ窓たの真ま中まの元は工げ合ぐが、  
宛さ然ながらですて——川端せんの一いち厘もん土かわ器らけ——これが爾その時ときも釣つつて  
いました。

庵室あんじつの客きやく人にんが、唯ただ今いま申ます欄らん干かんに腰こしを掛かけて、おくれ毛げ越こ  
にはらはらと靡なびいて通とる、雪ゆきのような襟えり脚あしを見み送おくると、今いま、小こ  
橋はしを渡わたつた処ところで、中ちゆうの十じゆう歳さい位いのがじやれて、その腰こしへ抱だき着きいた  
ので、白しろ魚おという指そを反そらして、軽かろくその小こ児どもの背せ中ちゆうを打うつた時とき  
だつたと申まします。

(お坊ちやま、お坊ちやま、)

と大声で呼び懸けて、

(手巾ハンケチが落ちました、)と知らせたそうではありますが、件くだんの土器わらけ殿どのも、餌えさは振舞ふるまう気で、粹いきな後姿を見送っていたものと見え  
ますよ。

(やあ、)と言つて、十二、三の一番上の児こが、駈ふけて返つて、橋の上へ落して行つた白い手巾ハンケチを拾つたのを、懐中ふところへ突つ込んで、黙つてまた飛んで行つたそうで。小児こどもだから、辞儀じぎも挨拶あいさつもな  
いでございませす。

御新姐ごしんぞが、礼心れいごころで顔だけ振向いて、肩おとがへ、頤おとがをつけるように、唇を少し曲げて、その涼すずしい目で、熟じつとこちらを見返つたのが



取違えたものらしい。私が許の客人と、ぴったり出会ったであり  
ましよう。

引込まれて、はツと礼を返したが、それツきり。御新姐の方は  
見られなくって、傍を向くと貴下、一厘土器が怪訝な顔色。

いやもう、しつとり冷汗を掻いたと言う事、——こりやなる  
ほど。極がよくない。

局外はたのものが何んの気もなしに考えれば、愚にもつかぬ事なれ  
ど、色気があって御覧じろ。第一、野良声のらごえの調子ツぱずれの可笑おかし  
い処へ、自分主人でもない余所よその小児こどもを、坊やとも、あの児ことも  
言うにこそ、へつらいがましい、お坊ちやまは不見識ゆきどまの行止り、  
申さば器量きりようを下げた話。

いまいっぽう  
今一方からは、右の土器殿にも小恥かしい次第でな。他人のしんせつで手柄をしたような、変な羽目になったので。

御本人、そうとも口へ出して言われませなんだが、それから何んとなく鬱ぎ込むのが、傍目にも見えたであります。

四、五日、引籠つてござつたほどで。

のち  
後に、何も彼も打明けて私に言いなさつた時の話では、しかしまたその間違が縁になつて、今度出会つた時は、何んとなく両方で挨拶でもするようになりはせまいか。そうすれば、どんなにか嬉しかろう、本望じゃ、と思われたそう。迷いと申すはおそろしい、情ないものでござる。世間大概の馬鹿も、これほどなことはないでございます。

三度目には御本人、」

「また出会ったんですかい。」

と聞くものも待ち構える。

「今度は反対に、浜の方から帰って来るのと、浜へ出ようとする御新姐ごしんぞと、例の出口の処で逢ったと言います。

大分もう薄暗くなつていましたそうで……土用どようあけからは、目

に立って日が詰つまります処ところへ、一度は一度と、散歩のお帰りが遅く

なつて、蚊遣かやりでも我慢が出来ず、私わたくしが此処ここへ蚊帳かやを釣もぐりつて潜

込こんでから、帰つて見えて、晩飯ばんめしももう、なぞと言われるさ

え折々の事。

爾時そのときも、早や黄昏たそがれの、とある、人顔ひとがお、朧おぼろながら月が出た

ように、見違えないその人と、思うと、男が五人、中に主人もいたでありましょう。婦人は唯御新姐一人、それを取巻く如くにして、どやどやと些と急足で、浪打際の方へ通つたが、その人数じゃ、空頼めの、余所ながら目礼処の騒ぎかい、貴下、その五人の男というのが。」

## 十五

「眉の太い、怒り鼻のがあり、額の広い、顎の尖つた、下目で睨むようなのがあり、仰向けさまになつて、頬髯の中へ、煙も出さず葉巻を突込んでいるのがある。くるりと尻を引捲つて、扇

子で叩いたものもある。どれも浴衣がけの下司はいいが、その中  
 に浅黄の兵児帯、結目をぶらりと二尺ぐらい、こぶらの辺まで  
 ぶら下げたのと、緋縮緬の扱帯をぐるぐる巻きに胸高は沙汰  
 の限。前のは御自分ものであろうが、扱帯の先生は、酒の上で、  
 小間使のを分捕の次第らしい。

これが、不思議に客人の気を悪くして、入相の浪も物凄く  
 なりかけた折からなり、あの、赤鬼青鬼なるものが、かよわ  
 い人を冥土へ引立てて行くようで、思いなしか、引挟まれた御  
 新姐は、何んとなく物寂しい、快からぬ、滅入った容子に見え  
 て、ものあわれに、命がけにでも其奴らの中から救って遣りたい  
 感じが起った。家庭の様子もほぼ知れたようで、気が揉める、と

言われたのでありますが、あなた貴下、これは無理じやて。

地獄の絵に、天女があまくだ天降つた処を描いてあつて御覧なさい。  
がき餓鬼が救われるようとうとで尊かる。

蛇が、つかわしめじやと申すのを聞いて、べんざいてん弁財天を、ああ、  
 お気の毒な、さぞお氣味が悪かろうと思うものはありますまいに。  
 迷いじやね。」

散策子はここに少しく腕組みした。

「しかし何ですよ、女は、自分の惚ほれた男が、べつびん別嬪の女房を持  
 つてると、嫉妬やくらしいようですがね。男は反対です。」

と聊いささか論ずる口吻くちふり。

「ははあ、」

「男はそうでない。惚れてる婦人が、おののこまちはな おおえのちさと 小野小町花、大江千  
 里月のつきという、ついく对句通りになると安心します。

唯ただいま今の、その浅黄あさぎの兵児帯へこおび、緋縮緬ひぢりめんの扱帯しごきと来ると、些ちと  
 考えねばならなくなる。耶蘇教やそきょうの信者の女房が、主キリストとしゆ  
 抱かれて寝た夢を見たと言うのを聞いた時の心こころもち地と、回々教ファイファイきょう  
 の魔神ましんになぐさまれた夢を見たと言うのを聞いた時の心こころもち地と  
 は、きつとそれは違いましょう。

どっち路みちうれし、嬉うれくない事は知れていますかね、前のは、先まず先まず  
 と我慢まんまんが出来る、後あとのは、堪かん忍にんがなりますまい。

まあ、そんな事は措おいて、何んだってまた、そう言う不愉快な  
 人間ばかりがその夫人を取巻いているんでしょう。」

「そこは、玉脇たまわきがそれ鍬くわの柄つかを杖つえに支ついて、ぼろ半纏ぼんでんに引ひくるめの一件で、ああ遣やつて大概たいがいな華族も及およばん暮しをして、交際やりかたにかけては銭金ぜにかねを惜おしまんでありますが、情なさけない事には、遣方やりかたが遣方やりかたゆえ、身分、名誉ある人は寄よつきませんで、悲かなしい哉かなその段は、如何いかがわしい連中ばかり。」

「お待ちなさい、なるほど、そうするとその夫人と言うは、どんな身分の人なんでしょうか。」

出家はあらためて、打うち領うちなずき、かつ咳しわぶきして、

「そこでございます、御新姐ごしんぞはな、年とし紀は、さて、誰たれが目にも大た略りやくは分わります、先まず二十三、四、それとも五、六かと言うところ処ろで、

で、



「それで三人の母様？ 十二、三のが頭ですかい。」

「否、どれも実子ではないでございます。」

「ままつ児ですか。」

「三人とも先妻が産みました。この先妻についても、まず、一くさりのお話はあるでございますが、それは余事ゆえに申さずとも宜しかろ。」

二、三年前に、今のを迎えたのでありますが、此処でありますよ。

何処の生れだか、育ちなのか、誰の娘だか、妹だか、皆目分らんでございます。貸して、かたに取ったか、出して買うようにしたか。落魄れた華族のお姫様じやと言うのもあれば、分散した

おおどこ  
 大所の娘御だと申すのもあります。そうかと思うと、箔はくのつ  
 いた芸娼妓くろうとに違ちがいと申すもあるし、豪えらいのは高等淫売いんばいの上あが  
 りだろうなどと、甚はなはだしい沙汰さたをするのがござって、丁とんと底知れず  
 の池に棲すむ、ぬしと言うもののように、素性すじょうが分らず、ついぞ  
 知つたものもない様子。」

## 十六

「何にいたせ、私わたくしなぞが通りすがりに見懸けましても、何んとも  
 当りがつかぬでございます。勿論また、坊主に鑑定かんていの出来ようは  
 ずはなけれどもな。その眉まゆのかかり、目つき、愛あい嬌きょうあいきょうがあると

申すではない。口許くちもとなども凜りんとして、世辞せじを一つ言うようには  
 思われぬが、唯何ただんとなく賢けんげに、恋も無常も知り抜いた風ふうに見  
 える。身体からだつきにも顔つきにも、情なさけが滴たると言いつた状さまじゃ。

恋い慕うものならば、馬士うまかたでも船頭せんとうでも、われら坊主ぼうしゆでも、無む  
 げに振切ふりきつて邪険じゃけんにはしそうもない、仮令たとえ恋はかなえぬまでも、  
 然しかるべき返歌へんかはありそうな。帯おビの結目むすびめ、袂たもとの端はし、何処どこへちよつ  
 と障さわつても、情なさけの露つゆは男おとこの骨ほねを溶解とろ解くかさずと言いうことなし、と申  
 す風情ふうせい。

されば、気高けたかいと申しても、天てん人にん神しん女にょの倅おもかげではのうて、姫ひめ  
 路めじのお天守てんしゆに緋ひの袴はかまで燈台とうだいの下したに何なにやら書ひもを繻とく、それ露したたが滴た  
 るように婀娜あでなと言いうて、水道すいどうの水みづで洗せんい髪かみではござらぬ。人じん無せ

跡絶えた山中の温泉に、唯一人雪の膚を泳がせて、丈に余る黒髪を絞るとかの、それに肖まして。

慕わせるより、懐しからせるより、一目見た男を魅する、力大。少からず、地獄、極楽、娑婆も身に附絡うていそうな婦人、従うて、罪も報も浅からぬげに見えるでございます。

ところへ、迷うた人の事なれば、浅黄の帯に緋の扱帯が、牛頭馬頭で逢魔時の浪打際へ引立ててでも行くように思われたのでありましょう——私どもの客人が——そういう心持で御覧なさればこそ、その後は玉脇の邸の前を通がかり。……

浜へ行く町から、横に折れて、背戸口を流れる小川の方へ引廻した蘆垣の蔭から、松林の幹と幹とのなかへ、襟から肩の

あたり、くつきりとした耳許みみもとが際立きわだつて、帯も裾すそも見えないのが、浮出うきだしたように真中へあらわれて、後前あとさきに、これも肩から上ばかり、爾時そのときは男が三人、一ならびひとに松の葉とすれすれに、しばらくききよう桔梗かるかや刈萱なびが靡くように見えて、段々だんだん低くなつて隠れたのを、何か、自分との事のために、離座敷はなれざしきか、座敷牢ざしきろうへでも、送られて行くゆように思われた、後前あとさきを引挟ひっばさんだ三人の漢おとこの首の、兇悪たしかなのが、確たしかにその意味を語つていたわ。もうこれきり、未来まで逢あえなかるうかとも思われる、と無理なことを言うのであります。

さ、これもじや、玉脇たまわきの家の客人きやくだち、主人まじりに、御新姐ごしんぞが、庭つきやまの築山つきやまを遊んだと思えば、それまででありますように。

とうとう表通りだけでは、気が済まなくなつたと見えて、前申まえした、その背戸口せどぐち、搦手からめてのな、川を一つ隔てた小松原の奥深く入り込んで、うろつくようになったそうで。

玉脇もちじの持地もちじじやありますが、この松原は、野開のびらきにいたしてござる。中には汐入しおいりの、ちよつと大きな池もあります。一面あに青あ草おぐさで、これに松みどりの翠みどりがかさなつて、唯ただいまごろ今頃すみれは菫すみれ、夏とこなつは常夏とこなつ、秋はぎは萩はぎ、真個まことに幽翠ゆうすいな処ところ、些ちと行ちらしつて御覽ごらんじろ。」

「薄暗やぶい処やぶですか、」

「藪やぶのようではありません。真ま蒼さおな処やぶであります。本までも御覽ごらんなさりながらお歩行あるきには、至極よつろ宜よろしいので、」

「蛇へびがいましたよう、」

と唐突だしぬけに尋ねた。

「お嫌いか。」

「何とも、どうも、」

「否いえ、何の因果か、あのくらい世の中に嫌われるものも少のうござる。」

しかし、気をつけて見ると、あれでもしおらしいもので、路みち端たなどを我われは顔がおで伸のして居とる処ところを、人が参まつて、熟じつと視ながめて御覽ごらんなさい。見返みかへしますがな、極たぎりが悪わるそうに鎌かまく首びを垂たれて、向むききに羞はにか含かみますよ。憎にくくないもので、ははははは、やはり心こころがありますよ。」

「心があられてはなお困こまるじやありませんか。」

「否、塩気を嫌うと見えまして、その池のまわりには些ともおりません。邸にはこの頃じや、その魅するような御新姐も留主なり、穴はすかすかと真黒に、足許に蜂の巢になつておりまして、蟹の住居、落ちるような憂慮もありません。」

## 十七

「客人は、その穴さえ、白髑髏の目とも見えたでありますよう。池をまわつて、川に臨んだ、玉脇の家造を、何か、御新姐のためには牢獄でもあるような考えでござるから。」

さて、潮のさし引ばかりで、流れるのではありません、どんよ



り鼠ねずみいろに淀よどんだ岸に、浮きもせず、沈みもやらず、未始終すえしじゆうは碎けて鯉鮒こいふなにもなりそうに、何時頃いつごろのか五、六本、丸太が浸ひたつているのを見ると、ああ、切組きりくめば船になる。繋つなぎ合わせば筏いかだになる。しかるに、綱も棹さおもない、恋の淵ふちはこれで渡らねばならぬいものか。

生身いきみでは渡られない。霊魂たましいだけなら乗れようものを。あの、樹立こだちに包まれた木戸きどの中には、その人が、と足を爪立つまだったりなんぞして。

蝶ちょうの目からも、余りふわふわして見えたでござろう。小松の中をふらつく自分も、何んだかその、肩から上ばかりに、裾すそも足もなくなつた心地、日中ひなかみの妙な蝙蝠こうもりじやて。

懐かいちゆう中から本を出して、

蠟ろうこう光たかくか高かりし懸やをて照らして紗むなし空、

花かぼう房よる夜つく搗こう

紅守宮しゆきゆう、

象口吹香ぞうこうこう※※暖をふいて、  
七どう星どう挂あたたか城せ聞せい漏しろ板にか、  
閨か漏か板か、

寒入罌さむさふし※ 殿に影いつて昏でんえい、  
昏いくらく、  
彩さい鸞らん簾れん

額くそう著こん霜をつく痕、

ええ、何ここんでも此こ処こは、  
蝓けらが鉤こう闌らんの下のに月にに鳴なく、  
魏ぎの文ぶん

帝ちに寵ちようせられた甄けん夫人ふじんが、  
後のちにおとろえて幽閉ゆうへいされたと言う

ので、鎖あけん阿甄をとぎす。とあつて、それから、

夢ゆめ入にか家もん門に上い沙つて渚しやしよ、  
天てん河が落お処つ長と

洲路しゆうの、  
洲路みち、

ねがわくばきみこうみようたいようのごとくなれ、  
願 君 光 明 如 太 陽、

しようはな  
妾を放て、そうすれば、魚に騎し、波を、いて去らん、という  
のを微吟して、思わず、襟にはらはらと涙が落ちる。目を睜つて、  
その水中の木材よ、いで、浮べ、鰭ふつて木戸に迎えよ、と睨む  
ばかりに瞻めたのでござるそうな。些と尋常事でありませんな。  
詩は唐詩選にでもありませんか。」

「どうですか。ええ、何んですつて——夢に家門に入つて沙渚  
のぼ。たましいさばく  
に上る。魂が沙漠をさまよつて歩行くようね、  
しゆうのみち  
洲路、あわれじやありませんか。  
てんがおつるところちよう

それを聞くと、私まで何んだか、その婦人が、幽閉されている  
ように思います。

それからどうしましたか。」

「どうと申して、段々おとが頤がこけて、日に増し目がくぼ窪んで、顔の色がいよいよ悪い。

或あるとき時、大奮発じゃ、と言うて、停車場前ていしやばの床屋へ、顔を剃そりに行ゆかれました。その時だつたと申す事で。

頭を洗うし、久しぶりで、些ちと心こころ持もちも爽さわやかになつて、ふらりと

出ると、田舎いなかには荒物屋あらかものやが多いでございます、紙たばこ、煙草かやり、蚊

遣香こそう、勝手道具かたて、何んでも屋と言つた店みせで。床店とこみせの筋向すじむこう

が、やはりその荒物店あらかものみせであります処ところ、戸外おもてへは水を打つて、軒のき

の提灯ちようちんにはまだ火を点ともさぬ、溝石みぞいしから往来えんだいへ縁台またを跨またが

せて、差向さしむかいに将棊しょうぎを行やっています。端はしの歩ふが附木つけぎ、お定さだまり

の奴で。

用なしの身体からだゆえ、客人が其処そこへ寄つて、路傍みちばたに立つて、両方ともやたらに飛車角ひしゃかくの取替えとりかこ、ころりころり差違さしちがえるごとに、ほい、ほい、と言う勇ましい懸声かけごえで。おまけに一人の親仁おやしなどは、媽々衆かかしゆうぎようずいが行水ひきわたの間、引渡されたものと見えて、小児こどもを一人胡坐あぐらの上へ抱いて、雁首がんくびを俯向けうつむに銜え煙管ぎせる。で銜くわえたまんま、待てよ、どっこい、と言うたびに、煙管ぎせるが打ぶ附つかりそうになるので、抱かれた児こは、親仁より、余計ひたいしわに皺しわを寄せて、雁首がんくびを狙ねらつて取ろうとする。火は附いていないから、火傷やけどはさせぬが、夢中で取られまいと振動ふりうごかす、小児こどもは手を出す、飛車を遁にげる。

よだれを垂たら々と垂らしながら、占しめた！ とばかり、やにわに  
 対あいて手の玉将たいしようを引摺ひつつかむと、大きな口をへの字形じなりに結んで見て  
 いた赭あから顔がおで、脊高せいたかの、胸の大きい禅門ぜんもんが、鉄挺かなてこのような  
 親指ひんので、いきなり勝った方の鼻ばしらつ頭つかをぐいと摺つんで、豪えらいぞ、と  
 引伸おほばしたと思し召おほせ、ははははは。――

十八

「大きな、ハツクサメをすると煙草たばこを落おした。額おでここツつりで小児こども  
 は泣き出す、負けた方は笑い出す、涎よだれと何んかと一緒でござろう。  
 鼻をつまんだ禅門ぜんもん、苦にが々にがしき顔がんしよく色いろで、指もてを持も余あました、

塩梅あんばいな。

これを機会しおに立去ろうとして、振返ると、荒物屋と葎よしず一枚、隣家りんかが間まに合わせの郵便局で。其処そこの門口かどぐちから、すらりと出たのが例のその人。汽車が着いたと見えて、馬車、車がらがらと五、六台、それを見に出たものらしい、郵便局の軒下のきしたから往來を透かすようにした、目が、ぼったり客人と出逢つたでありましょう。心ありそうに、そうすると直ぐに身を引いたのが、隔ての葎よしずの陰になつて、顔を背向そむけもしないで、其処そこで向直むきなつてこつちを見ました。

軒下の身を引く時、目で引ひつけられたような心持こころもちがしたから、こつちもまた葎よしず越こしに。

そのとき  
爾時は、総髪の銀杏返で、珊瑚の五分珠の一本差、  
髪の所為か、いつもより眉が長く見えたと言います。浴衣ながら  
帯には黄金鎖を掛けていたそうですが、揺れてその音の  
するほど、こつちを透すのに胸を動かした、顔がさ、葎簀を横に  
ちらちらと霞を引いたかと思う、これに眩くばかりになつて、思  
わずちよつと会釈をする。

向うも、伏目に俯向いたと思うと、リンリンと貴下、高く響い  
たのは電話の報知じや。

これをお待っていたでございませぬ。

すぐに電話口へ入つて、姿は隠れましたが、浅間ゆえ、よく聞  
える。



(はあ、私<sup>わたし</sup>。あなた、余<sup>あんま</sup>りですわ。余<sup>あんま</sup>りですわ。どうして来て下さらないの。怨<sup>うら</sup>んでいますよ。あの、あなた、夜<sup>よ</sup>も寝られませんが、あ、夜中に汽車のつくわけはありませんけれども、それでも今にもね、来て下さりはしないかと思つて。

私の方はね、もうね、ちよいと……どんなに離れておりましても、あなたの声はね、電話でなくつても聞えます。あなたには通じますまい。

どうせ、そうですよ。それだって、こんなにお待ち申している、私のためですもの……気をかねてばかりいらつしやらなくても宜<sup>よろ</sup>しいわ。些<sup>ちつ</sup>とは不義理、否<sup>いえ</sup>、父さんやお母さんに、不義理と云うこともありませんけれど、ね、私は生命<sup>いのち</sup>かけて、きつとですよ。

今夜にも、寝ないでお待ち申しますよ。あ、あ、たんと、そんなことをお言いなさい、どうせ寝られないんだから可うございます。怨みますよ。夢にでもお目にかかりましょうねえ、否、待たれない、待たれない……)

お道か、お光か、女の名前。

(……みいちゃん、さようなら、夢で逢いますよ。) ——  
きりきりと電話を切ったて。」

「へい、」

と思わず聞惚れる。

「その日は帰ってから、豪い元気で、私はそれ、涼しさやと言った句の通り、縁から足をぶら下げる。客人は其処の井戸端に焚き

まず据風呂すえぶろに入つて、湯をつかいながら、露出むきだしの裸体談話はだかばなし。

そつちと、こつちで、高たか声こえでな。尤もつとも隣近所となりきんじよはござらぬ。

かけかまいなしで、電話でんわの仮声こわいろまじりか何かで、

(やあ、和尚おしょうさん、梅の青葉うめから、湯気ゆげの中へ糸を引くのが、

月影つきかげに光つて見える、蜘蛛くもが下りた、)

と大気だいきえんじや。

(万歳ばんざいばんざい、今夜しよのびお忍しのか。)

(勿論もちろん、)

と答えて、頭のあたりをぎぶぎぶと、仰あおいで天あまに愧はじざる顔かおつ色きでありました。が、日頃おこなの行いいから察さして、如何いかに、思おもい死じをすればとて、いやしくも主ぬしある婦人ふじんに、そういう不ふり料簡りょうけんを

出すべき仁じんでないと思ひました、果せる哉かな。

冷ひややつこ 奴やつこに紫蘇しその実、白瓜しろうりの香かうの物もので、私わたくしと取膳とりぜんの飯あがを上あが

ると、帯おビを緊しめ直して、

(もう一度そこいらを。)

いや、これはと、ぎよつとしたが、垣かきの外がはへ出られた姿は、海の方うみへは行ゆかないで、それ、その石段いしだんを。」

一面いちめんの日ひ当ありながら、蝶ちょうの羽はの動うごくほど、山やまの草くさに薄雲うすぐもが軽かろく靡なびいて、檐のきから透すかすと、峰みねの方は暗くらかった、余あり暖あたさが過あぎたか  
ら。

降ろうも知れぬ。日向へ蛇ひなたが出ている時は、雨を持つという、来がけに二度まで見た。

で、雲が被かぶつて、空気が湿しめった所せ為いか、笛ふえたいこ太鼓のの囃はやし子の音が山一ツ越えた彼方かなたと思うあたりに、蛙かえるが唧すだくように、遠いが、手に取るばかり、しかも沈んでうつつの音楽のように聞えて来た。霧もやで蠟管ろうかんの出来た蓄音器ちくおんきの如く、かつ遙はるかに響く。

それまでも、何かそれらしい音はしたが、極めて散漫で、何の声とも纏まとまらない。村々の蔀しとみ、柱としようし、戸障子の、勝手道具などが、日永ひながに退屈して、のびを打ち、欠伸あくびをする氣勢けはいかと思つた。いまだ昼前だのに、——時々牛の鳴くのが入交いりまじつて——時に笑きようい興う

ずるような人声も、動かない、静かに風に伝わるのであった。

フト耳を澄ましたが、直ぐに出家の言ことばになつて、

「大分だいぶん町の方が賑にぎわいますな。」

「祭礼でもありませんか。」

「これは停車場ていしやば近くにいらつしやると承うけたまわりましたに、つい御近所

でございます。

停車場の新築びら開き。」

如何いかにも一ひとつき月ばかり以前から取沙汰とりさたした今日は当日。規模を

大きく、建たて直なおした落成式、停ステイション車場に舞台がかかる、東京から

俳やくしや優うが来る、村のものの茶番がある、餅もちを撒まく、昨夜も夜通し

騒さわいでいて、今朝けさ来がけの人通りも、よけて通るばかりであつた

に、はたと忘れていたらしい。

「まったくお話しに聞惚ききとれましたか、こちらが里離さとほなれて閑静な所せ為いか、些ちつとも気が附つかないでおりました。実は余り騒そうぞう々しいので、そこを遁にげて参ったのです。しかし降りそうになって来ました。」

出家の額ひたいは仰向あおむけに廂ひさしを潜くぐつて、

「ねんばり一ひとしめ 湿りでございましょう。地雨じあめにはなりますまい。

何な、また、雨具もござる。芝居を御見物おぼしめしの思召おぼしめしがなくなれば、まあ御ご緩ゆつくりなすつて。

あの音もさ、面白おもしろ可笑おかしく、こつちも見物に参る気でもござる

と、じつと落着いてはいられないほど、浮いたものでありますが、さてこう、かけかまいなしに、遠とほざかっておりますと、世を一ツ

隔てたように、寂しい、陰気な、妙な心地こころちがいたすではありませ  
んか。」

「真ま箇たたくですね。」

「昔、井戸を掘ると、地じの下に犬いぬ鷄とりの鳴く音ね、人声ね、牛ぎゅう車うしやの  
軋きしる音などが聞えたという話があります。それに似ておりますな。  
峠から見る、霧の下だの、暗やみの浪打なみうち際ぎわ、ぼうと灯あかりが映うつる処ところだ  
の、かように山の腹を向うへ越した地じの裏などで、聞きますのは、  
おかしく人間業にんげんわざでないようだ。夜中に聞いて、狸たぬき囃ばやし子こと  
言うのも至極でございます。

いや、それに、つきまして、お話の客人でありますが、  
と、茶を一口急いで飲み、さしおいて、



「さて今申した通り、夜分にこの石段を上つて行かれたのでありまして。

しかしこれは情に激して、発奮んだ仕事ではなかつたのでございます。

こうやって、この庵室に馴れました身には、石段はつい、通り廊下を縦に通るほどな心地でありますからで。客人は、堂へ行かれて、柱板敷へひらひらと大きくさす月の影、海の果には入りの雲が焼残つて、ちらちら真紅に、黄昏過ぎの渾沌とした、水も山も唯一面の大池の中に、その軒端洩る夕日の影と、消え残る夕焼の雲の片と、紅蓮白蓮の咲乱れたような眺望をなさつたそなた。これで御法の船に同じい、御堂の縁を離れさえ

なさらなかつたら、海に溺れるおぼようなことも起らなんだでござい  
ましよう。

爰ここに希代きだいな事は――

堂の裏山の方で、頻しきりに、その、笛ふえたいこ太鼓、囃はやし子が聞えたと申  
す事――

唯ただいま今、それ、聞えますな。あれ、あれとは、まるで方角は違  
います。――

と出家ころもは法衣ひさしでずいと立って、廂みどうから指を出して、御堂みどうの山を  
左かたの方へぐいと指した。立ち方の唐突だしぬけなのと、急めさきなのと、目め前まへを  
塞ふさいだ墨すみ染ぞめに、一いつてん天てんする墨すみを流すかと、袖そでは障子を包んだの  
である。

## 二十

「堂の前を左に切れると、空へ抜いた隧トンネル道のように、両り端ようはしから突つきで出でました巖いわの間、樹立こたちを潜くぐつて、裏山へかかるであります。

両方谷たに、海の方は、山が切れて、真中まんなかの路みちを汽車が通る。一

方ひとたには一谷落ひとたにちて、それからそれへ、山また山、次第に峰が重な

つて、段々雲霧くもぎりが深くなります。処々ところどころ、山の尾が樹の根のよ

うに集あつまつて、広々とした青田あおたを抱かかえた処ところもあり、炭焼小屋を包ん

だ処ところもございます。

其処そこで、この山伝いの路は、岨がけの上を高い堤防つつみを行ゆく形、時々、

島や白帆しらほの見晴しへ出ますばかり、あとは生おい繁しげつて真暗まつくらで、  
 今時は、さまでにもありませんが、草が繁しげりますと、分けずには  
 通とほられませぬ。

谷うぐいすには鶯うぐいす、峰みねには目白めじろ四十雀しじゆうからの囀さえずっている処ところもあり、紺こんじよ  
 青うの巖いわの根ねに、春すみれは堇すみれ、秋りんどうは竜胆りんどうの咲さく処ところ。山清水やましみずがしと  
 しと湧わく径こみちが葉研やげんの底そこのよう、両側りょうがわの篠しの笹ささを跨またいで通とほるな  
 ど、ものもの小半道こはんみち踏ふみ分わけて参まゐりますと、其処そこまでが一峰ひとみねで。  
 それから岨がけになつて、郡ぐんが違ちがひ、海うみの趣おもむきもかわるのでありますが、  
 その岨がけの上に、たとえて申まをさば、この御堂みどうと背せ中ちゆう合あわせに、山の  
 尾おへ凭よつかかつて、かれこれ大仏だいぶつぐらいな、石地蔵いしじぞうが無手むずと  
 胡坐あぐらしてござります。それがさ、石地蔵いしじぞうと申し伝えるばかり、よ

ほどのあら刻みで、まず坊主形の自然石じねんせきと云うても宜しいよろ。妙おやおに御顔おやおの尖すこがった処すこが、拜むと凄すこうござつてな。

堂は形だけ残つておりますけれども、勿もつたい体たいないほど大破たいはいたして、密そつと参つても床ゆかなぞずぶずぶと踏ふみぬ抜ぬきますわ。屋根も柱も蜘蛛くもの巣くものように狼藉ろうぜきとして、これはまた境けいだい内ないへ足いればの入場いれはもなく、崖がけへかけて倒れてな、でも建物があつた跡あとじや、見霽みはらしの広場ひろばになつておりますから、これから山越やまごしをなさる方かたが、うっかり其処そこへござつて、唐突だしぬけの山やま仏ほとけに胆きもを潰つぶすと申まをします。其処そこを山やま続つきの留とまりにして、向うへ降りる路みちは、またこの石段いしだんのようなものではありません。わずかの間も九十九折つづらおりの坂道さかみち、嶮けわしい上に、なまじつなまじつか石いしを入れたあとのあるだけに、爪立つまだつて飛とび々とびに這は

い下りおなければなりません、この坂の両方に、五百体千体と申す数ではない。それはそれは数え切れぬくらい、いずれも一尺、一尺五寸、御丈おんたけ三尺というのおんたけはない、小さな石いしほとけ 仏ぼつがすすく並んで、最も長い年ねんげつ月げつ、路傍みちばたへ転まげたのも、倒れたのもあつたでありましようが、さすがに跨またぐものはないと見えます。もたれなりにも櫛くしの齒くしのように揃そろつてあります。

これについて、何かいわれのございましたことか、一いちいち々いち女のいちいち名いとしと、亥年うまどし、午年うまどし、幾歳いとし、幾歳いとし、年齢ねんねいとが彫ほりつけてございますいとしな、何時いつの世よにか、諸国おんなの婦人おんなたちが、挙こぞつて、心願しんがんを籠こめたものでございましょう。ところで、雨露あめつゆに黒髪くろかみは霜しもと消え、袖裾そですそも苔こけと変かつて、影かげばかり残のこつたが、お面かおの細とがく尖とがつた処ところ、

以前は女によたい体であつたらうなどという、いや女体の地藏というは  
ありませんが、さてそう聞くと、なお気味が悪いではございませ  
んか。

ええ、つかぬことを申したようではありますが、客人の話につい  
て、些ちと考えました事がござる。客人は、それ、その山やま路みちを行  
かれたので——この觀かん音おんの御堂みどうを離れて、「

「なるほど、その何んとも知れない、石像の処へ、」  
と胸を伏せて顔を見る。

「いやいや、其そこ処こまでではありません。唯ただその山路へ、堂の左の、  
巖いわ間まを抜けて出たものでございます。

トというのが、手に取るように、嘯はやしの音が聞えたからで。

直じきその谷間たにあいの村あたりで、騒いでいるように、トントンと山腹へ響いたと申すのでありますから、ちよつと裏山へ廻りさえすれば、足許みおに瞰みお下ろされますような勘かんじよう定じようであつたので。客人は、高い処ところから見物をなさる氣でござつた。

入り口くちはまだ月のたよりがございます。樹の下を、草を分けて参りますと、処ところどころ々々窓のように山が切れて、其処そこから、松葉まつばか搔き、枝拾い、じねんじよ穿ほりが谷へさして通行する、下の村へ続いた路みちのある処が、あつちこつちにいくらもございます。

それへ出ると、何処どこでも広々と見えますので、最初左の浜はまびき庇し、今度は右の茅かやの屋根と、二、三箇がしよ処、その切目きれめへ出て、覗のぞいたが、何処どこにも、祭礼まつりらしい処はない。海は明あかるく、谷は煙けぶつて



」。

二十一

「けれども、その囃子の音は、草一叢、樹立一畝出さえすれば、直き見えそうに聞えますので。一二足が三足、五足が十足になつて段々深く入るほど——此処まで来たのに見ないで帰るものこりおし  
 残惜い気もする上に、何んだか、旧へ帰るより、前へ出る方が路も明いかと思われて、些と急足になると、路も大分上りになつて、ぐいと伸上るようになつて、思い切つて真暗な中を、草を撈つて、身を退いて高い処へ。ぼんやり薄明るく、地ならしが

してあつて、心持、墓地の縄張なわばりの中ででもあるような、平たいらな丘の上へ出ると、月は曇つてしまつたか、それとも海へ落ちたかという、一方は今来た路みちで向うは岨がけ、谷か、それとも浜辺かは、判然せぬが、底そこ一面いちめんに靄もやがかかつて、その靄に、ぼうと遠方の火事のような色が映うつつていて、篝かがりでも焼たいているかと、底澄そこすんで赤く見える、その辺あたりに、太鼓たいこが聞える、笛も吹く、ワアという人声こゑがする。

如何いかにも賑にぎやかそうだが、さて何処どことも分らぬ。客人は、その朦も朧ろうろうとした頂いただきに立つて、境さかいは接しても、美濃みの近江おうみ、人情も風俗も皆違ちがう寝物語の里の祭礼まつりを、此処ここで見ると思われた、と申しま

その上、宵宮よみやにしては些ちと賑にぎやか過ぎる、大方ほんまつり本祭まつりの夜よ？

それで人の出盛りでさかが通り過ぎた、よほど夜更よふけらしい景色なごに視ながめて、しばらく茫ぼうぜん然ぜんとしてござったそうなの。

ト何んとなく、心寂ここさびしい。路みちもよほど歩行あるいたような気がするので、うっとり草臥くたびれて、もう帰ろうかと思う時、その火気かきを包んだ靄もやが、こう風かぜにでも動くかと覚えて、谷底やちから上へ、裾すそあがり次第しだいに色が濃こうなつて、向うの山かけて映る工合くあいが直じき目の前まへで燃もしている景色しき——最もも靄もやに包もまれながら——

そこで、何か見極みきわめたい気きもして、その平地ひらちを真直まっすぐに行ゆくと、まず、それ、山の腹はらが覗のぞかれましたわ。

これはしたり！ 祭礼まつりは谷間たにまの里さとからかけて、此処ここがそのとま

りらしい。見た処ところで、薄くなつて段々に下へ灯影ひかげが濃くなつて次第にぎやに賑かになつています。

やはり同一おんなじような平たいらな土で、客人のござる丘と、向うの丘との中みに箕みの形になつた場所。

爪つま尖さきも迂すべらず、静しずかに安やす々と下やすりられた。

ところが、箕みの形の、一方はそれ祭礼まつりに続く谷みちの路みちでございましよう。その谷の方に寄つた畳たたみなら八畳ばかり、油が広く染にじんだ体ていに、草がすつぺりと禿はげました。「

といいかけて、出家せとものは瀬戸物の火鉢えんを、縁えんの方へ少しずらずらして、俯うつむ向むいて手で畳たたみを仕切つた。

「これだけな、赤地あかじの出た上へ、何かこうぼんやりうずくま踞まつたものが

ある。」

ト足を崩してとかくして膝に手を置いた。

思わず、外の方を見た散策子は、雲のやや軒端に近く迫るのを知った。

「手を上げて招いたと言います——ゆったりと——行くともなしに前へ出て、それでも間二、三間隔つて立停まつて、見ると、その蹴つたものは、顔も上げないで俯向いたまま、股引ようものを穿いている、草色の太い胡坐かいた膝の脇に、差置いた、拍子木を取つて、カチカチと鳴らしたそうで、その音が何者か歯を噛合わせるように響いたと言います。

そうすると、」

「はあ、はあ、」

「薄汚れた帆木綿めいた破穴だらけの幕が開いたて、」

「幕が、」

「さよう。向う山の腹へ引いてあつたが、やはり靄もやに見えていたので、そのものの手に、綱が引いてあつたと見えます、うずくま踞つたままで立ちもせんので。」

くぼ窪んだ浅い横穴じゃ。大きかつたといえますよ。正面に幅一間けんばかり、もつと尤も、この辺にはちよいちよいそういうのを見懸けます。背戸せどに近い百姓屋などは、つけものおけ漬物桶を置いたり、青物を活いけて重ち宝ようほうがる。で、幕を開けたからにはそれが舞台で。」

「なるほど、そう思えば、舞台の前に、木の葉がばらばらと散ばつた中へ交つて、投銭が飛んでいたらしく見えたそうでございます。

幕が開いた——と、まあ、言う体であります、さて唯浅い、扁い、窪みだけで。何んの飾つけも、道具だてもあるのではござらぬ。何か、身体もぞくぞくして、余り見ていたくもなかつたそうだが、自分を見懸けて、はじめたものを、他に誰一人いるではなし、今更帰るわけにもなりませんような羽目になつたとか言つて、懐中の紙入に手を懸けながら、茫乎見ていたと申

します。

また、陰気な、湿しめっぽい音おんで、コツコツと拍子木ひょうしぎを打違ぶちがえる。

やはりそのものの手から、ずうと糸つなが繋がつながっていたものらしい。舞台の左右、山の腹へ斜めにかかった、一ひとはば幅の白い靄もやが同じく幕でございました。むらむらと両方から舞台際ぶたいぎわへ引寄せられると、煙うずまが渦うずまくように畳まれたと言います。

不細工ながら、窓のように、箱のように、黒い横穴が小さく一ツずつ三五十と一側ひとかわなら並べに仕切つてあつて、その中に、ずらりと婦人おんなが並んでいました。

坐つたのもあり、立つたのもあり、片膝かたひざ立てたじだらくな姿



もある。緋ひの長襦袢ながじゆばんばかりのもある。頬ほのあたりに血のたれて  
 いるのもある。縛くわられているのもある、一目ひとめ見たが、それだけで、  
 遠くの方は、小さくなって、幽かすかになって、唯ただ顔ばかり谷間たにまに白しろ百  
 合ゆりの咲いたよう。

慄然ぞつとして、遁にげもならない処ところへ、またコンコンと拍子木ひょうしぎが  
 鳴る。

すると貴下あなた、谷の方へ続いた、その何番目かの仕切の中から、  
 ふらりと外へ出て、一人、小さな婦人おんなの姿が、音もなく歩行あるいて  
 来て、やがてその舞台あがへ上ったでございませうが、其処そこへ来ると、  
 並なみの大きさの、しかも、すらりとした脊丈せたけになって、しよんぼり  
 した肩の処へ、こう、頤おとがいをつけて、熟じつと客人の方を見向いた、そ

の美しさ！

まさしく玉脇の御新姐で。」

二十三

「寝衣ねまきにぐるぐると扱帯しごきを巻いて、霜しものような跣足はだし、そのまま向うむきに、舞台の上へ、崩折くずおれたように、ト膝を曲げる。

カンと木を入れます。

釘づけくぎのようになって立窘たちすくんだ客人の背後うしろから、背中を摺すつて、ずツと出たものがある。

黒い影で。

見物が他たにもいたかと思う、とそうではない。その影が、よろよろと舞台へ出て、御新姐ごしんぞと背中合わせにぴったり坐とつた処ところで、こちらを向いたでございましょう、顔を見ると自分です。」

「ええ！」

「それが客人御自分なのであります。

で、私わたくしへお話はなに、

(真個ほんとうなら、其処そこで死ななければならんのでした、)

と言いつて歎たんそく息そくして、真蒼まっさおになりましたつけ。

どうするか、見ていたかつたそうです。勿論もちろん、肉は躍おどり、血

は湧わいてな。

しばらくすると、その自分が、やや身体からだを捻ねじ向けて、惚ほれ惚ほれ々

と御新姐ごしんぞの後姿を見入ったそうで、指の尖さきで、薄色の寝衣ねまきの上へ、  
 こう山形に引いて、下へ一ツ、△を書いたでございますな、三角  
 を。

見ている胸はヒヤヒヤとして冷汗がびっしりになる。

御新姐ごしんぞは唯首垂ただうなだれているばかり。

今度は四角、□、を書きました。

その男、即客人御自分が。  
すなわち

御新姐の膝にかけた指の尖さきが、わなわなと震えました……とな。

三度目に、○、円まるいものを書いて、線の端はしがまとまる時、颯さつと

地を払つて空へ抉えぐるような風が吹くと、谷底の灯ひの影がすつきり

冴さえて、鮮あざやかに薄紅梅うすこうばい。浜か、海の色か、と見る耳許みみもとへ、ち

やらちやらと鳴ったのは、投げ銭と木の葉の摺れ合う音で、くるくと廻った。

気がつくくと、四、五人、山のように背後から押被さつて、何時の間にか他に見物が出来たて。

爾時、御新姐の顔の色は、こぼれかかった艶やかなおくれ毛を透いて、一入美しくなつたと思うと、あのその口許で莞

爾として、うしろざまにたよたと、男の足に背をもたせて、膝を枕にすると、黒髪が、ずるずると仰向いて、真白な胸があらわれた。その重みで男も倒れた、舞台がぐんぐんずり下つて、はツと思うと旧の土。

峰から谷底へかけて哄と声がする。そこから夢中で駈け戻つて、

蚊帳かやに寝た私わたくしに縋りついて、

(水を下さい。)

と言うて起された、が、身体中からだじゆうきず疵だらけで、夜露にぬれず濡で

あります。

それからあかつき暁かけて、一切の懺悔ざんげ話。

翌日あくるひは一日寝ていちにちござった。午ひるすぎに女中が二人ついて、この

御堂みどうへ参詣なされた御新姐ごしんぞの姿を見て、私はあわ慌てて、客人に知ら

さぬよう、暑いのに、貴下あなた、この障子を閉切しめきつたでございますよ。

以来、あの柱に、うたゝ寐ねの歌がありますので。

客人はあと二、三日、石の唐櫃からびつに籠こもつたように、我われと我を、

手足も縛るばかり、謹つつしんで引籠ひきこもつてござつたし、私わたくしもまた油断

なく見張っていたでございませうが、貴下、聊か目を離しました僅わずかの隙ひまに、何処どこか姿が見えなくなつて、木樵きこりが来て、点燈頃ひともしごろ、  
 (私わし、今、来がけに、彼処あそこさ、蛇じゃの矢倉やぐらで見かけたよ、)  
 と知らせました。

客人はまたその晩のような芝居が見たくなつたのでございませう。

死骸しがいは海で見つかりました。

蛇じゃの矢倉やぐらと言うのは、この裏山の二ツ目の裾すそに、水のたまつた、むかしからある横穴で、わツというところ、おう——と底知れず奥の方へ十里も広がつて響きます。水は海まで続いていると申もうしつた伝たえるであります、如何いかがなものでもございませうかな。」

雨が二階にかい家やの方かたからかかつて来た。音ばかりして草も濡らさず、  
 裾すそがあつて、路みちを通かようようである。美た人おやめの靈れいが誘さそわれたろう。  
 雲くもの黒くろ髪かみ、桃もも色いろ衣ぎぬ、菜種なたねの上うへを蝶ちようを連つれて、庭にわに來きて、  
 炎うと並ならんで立たつて、しめやかに窓まどを覗のぞいた。  
 陽かげろ



## 青空文庫情報

底本：「春昼・春昼後刻」岩波文庫

1987（昭和62）年4月16日第1刷発行

1999（平成11）年7月5日第19刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十卷」岩波書店

1940（昭和15）年5月

初出：「新小説」

1906（明治39）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：平野彩子、土屋隆

2006年7月18日作成

2011年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 春昼

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>